

重遺跡全体ではA区B区付近の微高地上の竪穴住居等や他の微高地上の集落単位からは鉄器は出土していない。このことからこれら丘陵裾部分の竪穴住居群は弥生後期中葉から後葉にかけてやや集中的に鉄器を保有していた集落単位と言える。

県下で同様の事例として下川津遺跡における弥生後期集落においても、微高地単位で金属器の保有量の違いが見られる。これらは鉄器化の進行する後期にあつて集落内における鉄器の保有形態の一例と思われる注意すべき点である。

(5) D3区の概要

D3区は本遺跡調査区の東端に位置し、大局的には丘陵部分の緩斜面、もしくはテラス部分になる。耕作土下に約20cm程の中世包含層が堆積し、花崗岩礫を多量含む黄灰色系粘質土の遺構面に至る。この黄灰色系粘質土上面で中世期と弥生時代の遺構が一面で検出される状況で、部分的には上記包含層上面より掘り込まれる中世期の所産のピット等も少量存在する。この下層には北東方向から南西方向へ向かう小規模な埋積谷が存在し、埋土中より少量の縄文時代と推定される楔形石器、石鏃、サヌカイト剥片が出土している。

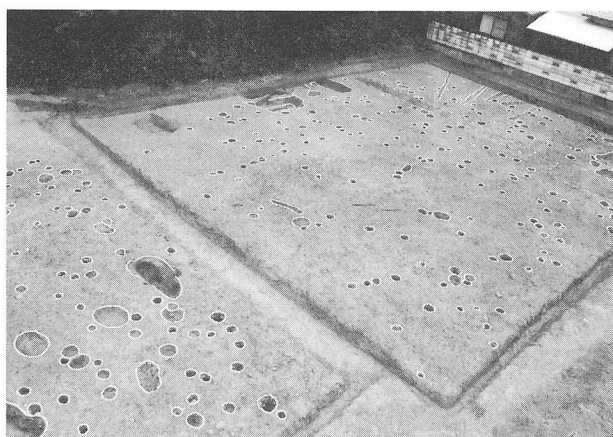


写真87 D3区第1遺構面完掘状況（北から）

第1遺構面SP33 このD3区では弥生時代の遺構は殆ど確認されない。数多く検出しているのは大半が13世紀から14世紀にかけての遺構である。SP33は調査区中央南端で検出したピットである。このピットからは土師器杯10点、北宋銭9枚、不明鉄器2点が埋納された状態で出土している。土師器杯は北から南へ1列に傾け砂岩礫をはさみこむ状態で据え置かれている。銭、鉄器は杯の間に入れられた状態で銭1枚のみ上位の埋土中より出土した。出土した土師器杯より13世紀前半の年代が与えられよう。



写真88 D3区第1面SP33遺物出土状況（西から）

土師器の杯10点のみ掲載した。口径が14cm程、器高が4cm程の画一した法量をもつ。また、底部の調整方法はすべて回転ヘラ切りされている。この柱穴の周辺には同時期の掘立柱建物を検出しているが、調査中の為、本遺構との詳細な位置関係は今後の検討課題とする。

D3区下層埋積谷

上記遺構面を調査中にベース土より、サヌカイト剥片の出土を見たために下層確認調査を実施したところ、調査区中央を北東から南西方向への小規模な埋積谷を検出した。幅約15m程度、第1遺構面からこの埋積谷最深部まで約1.3m程を測る。埋積谷の埋土は2つに大別される。第1遺構面ベース土であ

る花崗岩礫を多量に含む黄灰色粘質土が上記の幅で東西方向に緩やかに落ち込むように堆積し、厚い部分で70cm程を測る。この下層には50～60cmほどの黄色粗砂混じり粘質土が堆積している。サヌカイトはこの下層の部分から主に検出された。その内訳はすべてサヌカイト製で凹基式石鏃1点、楔形石器残欠2点、剥片20点程度の出土を見た。これらの総数からみて周辺に集落域が存在するとは断定しがたい状況にあると言えよう。ここでは考古学的に見た土層の形成年代の提示にとどめる。

(6) 東側調査区 (A区～D区) のまとめ

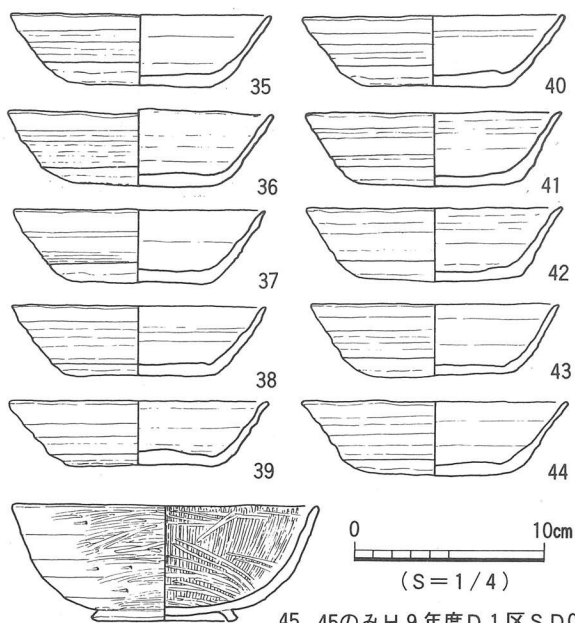
昨年度の調査と合わせてかなり遺跡の全容が明らかになった。ここでは上層遺構面(第1遺構面)と下層遺構面(第2遺構面)にわけて今後の検討課題を示す。

第2遺構面(弥生時代中期初頭～後期末)

基本的には2つの集落単位が認められた。A・B区付近の南から北へ二股に分かれ舌状に延びる微高地部分とD区の丘陵裾部分である。A・B区の微高地部分には中期初頭から竪穴住居が造られ始め後期末まで散発的に居住域として機能している。D区丘陵裾部分は後期中葉段階より竪穴住居群が造られ始めている。A～D地区全体で検出した19棟の竪穴住居の内、中期のものは6棟で後期の殆どが後期中葉以降の所産であるから、ここに集落単位の規模の増大と立地の変化を読みとることができる。この状況は本遺跡、本遺跡周辺だけではなく、大内町原間遺跡周辺においても同様な傾向を示す。このことは本遺跡の継続性や内的な変化だけではなく、周辺の遺跡の動向を含めた遺跡の性格・規模の変化について時期別に今後検討を要するであろう。

第1遺構面(古墳時代前期～近世)

各時代の遺構が混在する中で比較的13世紀から14世紀にかけての遺構・遺物が目立つ。A区B区付近とD3区付近に掘立柱建物等が集中検出された。昨年度のG1区の調査においても比較的集中して当該期遺構が検出されており、集落が今回の全体の調査区内で幾つかの単位に分かれそうである。また条里型地割りに相当する溝は未検出だが、集落構成要素だけではなく、調査区全体で当該期の集落位置関係や時間的変遷を把握していくことが必要である。また、集落に付属する土壙墓等の分析も必要であろう。



45 45のみH9年度D1区SD08より出土

第96図 D3区第1遺構面SP33出土遺物実測図

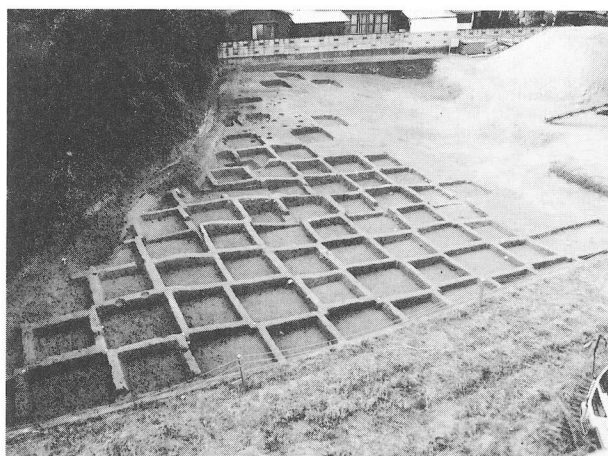


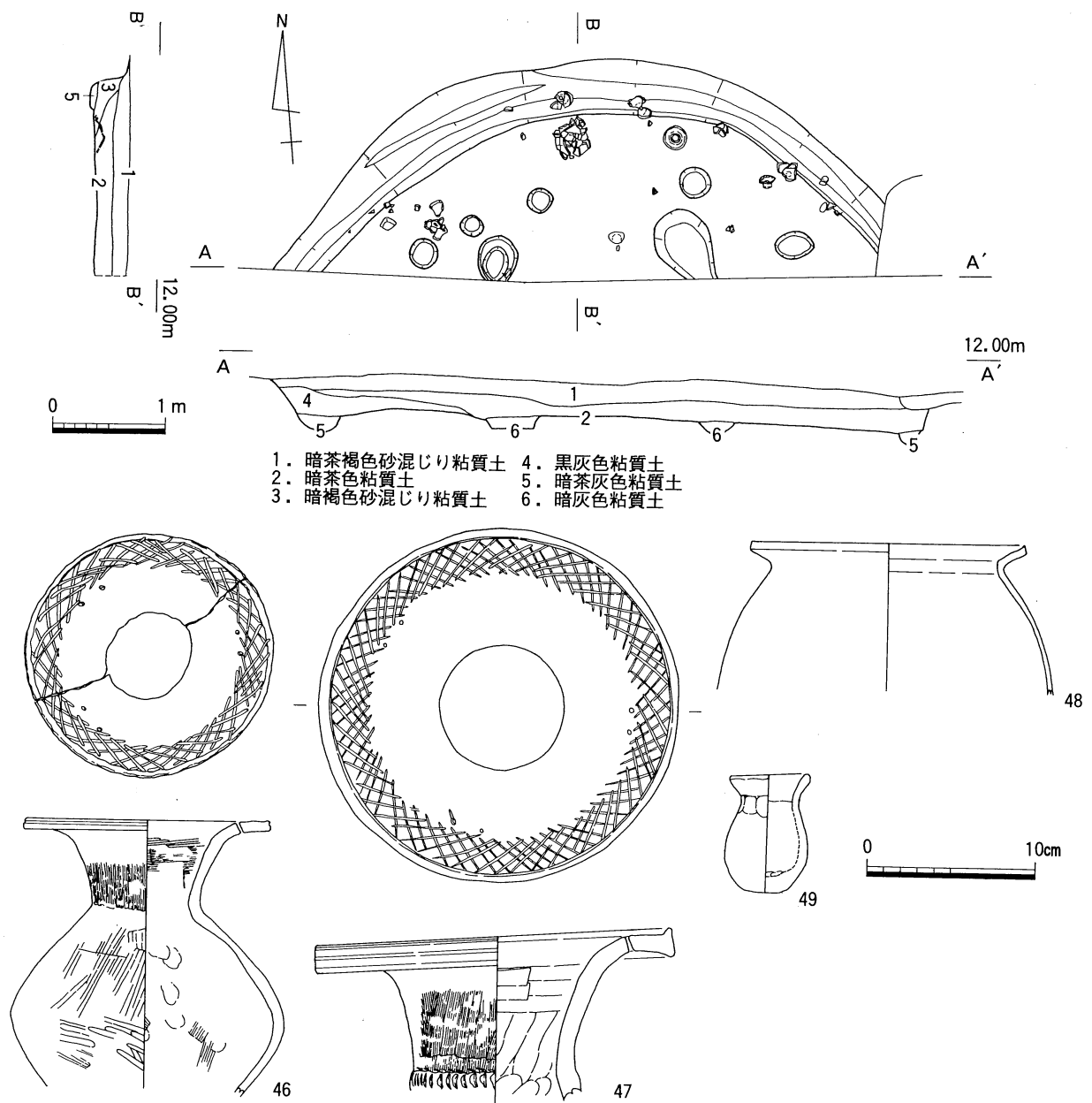
写真89 D3区下層埋積谷全景(北から)

3. 西側調査区 (E区~G区) の成果

F 2 区東橋脚部第 2 面 S H 01 調査区南の壁際で検出した円形の竪穴住居である。調査区際のため、全形は検出していないが直径は約5.8mと推定でき、検出面から床面までの深さは30cmであった。床面の壁際には壁溝が巡っている。床面には、同一円周上にある柱穴を 5 基検出しており、また、所々に焼土が見られる。遺物の残り具合は比較的良好で、完形に近い状態で出土している。

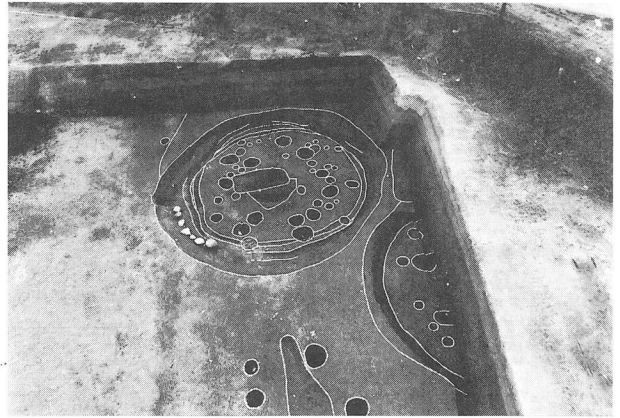
46・47は壺で口縁部はいずれも大きく開き、内面には丁寧に文様を施している。また 2 個 1 対の穿孔がある。48は甕で、口縁部端部は内面を強くナデている。49はミニチュア土器で口縁部立ち上がり部の外面には指押さえを行っている。また底部は不安定な平底である。

F 2 区東橋脚部第 2 面 S H 02 調査区南東部で検出した円形の竪穴住居である。直径は6.7~6.9mで、



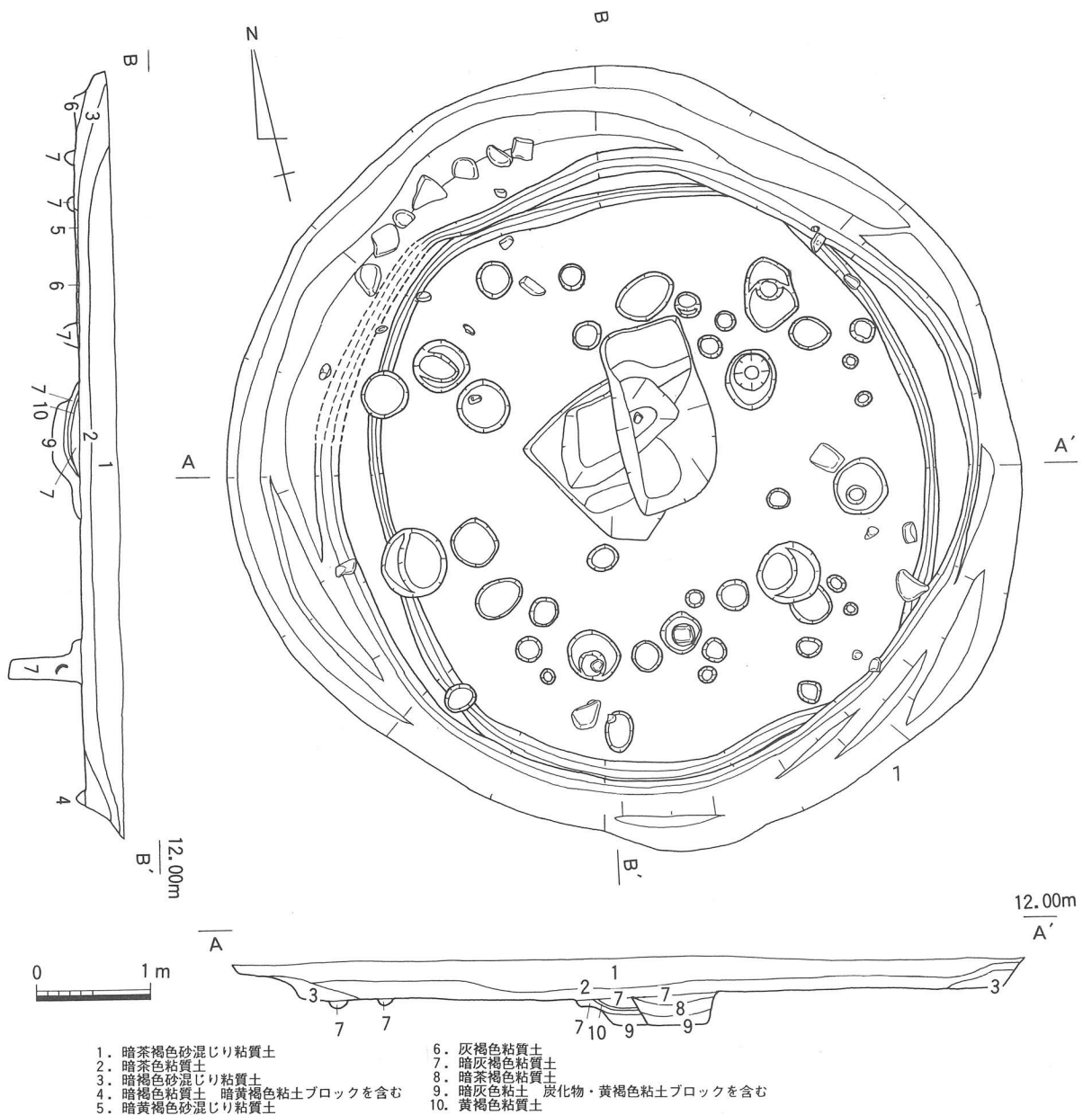
第97図 F 2 区東橋脚部第 2 面 S H 01 平・断面図 (1/60), 出土遺物 (1/4)

検出面から床面までの深さは36cmであった。床面の壁際には壁溝が2条巡っており、柱穴の数も多く、2つの中央土坑が切り合っていることからこの住居は建て替えられたと考えられる。中央土坑の平面形はいずれも楕円形で、新しい方は1.55m×0.83m、古い方の長径は1.28mであるが短径は不明である。また床面には所々焼土が見られる。遺物としては弥生時代中期後半の土器とサヌカイト片が少量出土している。

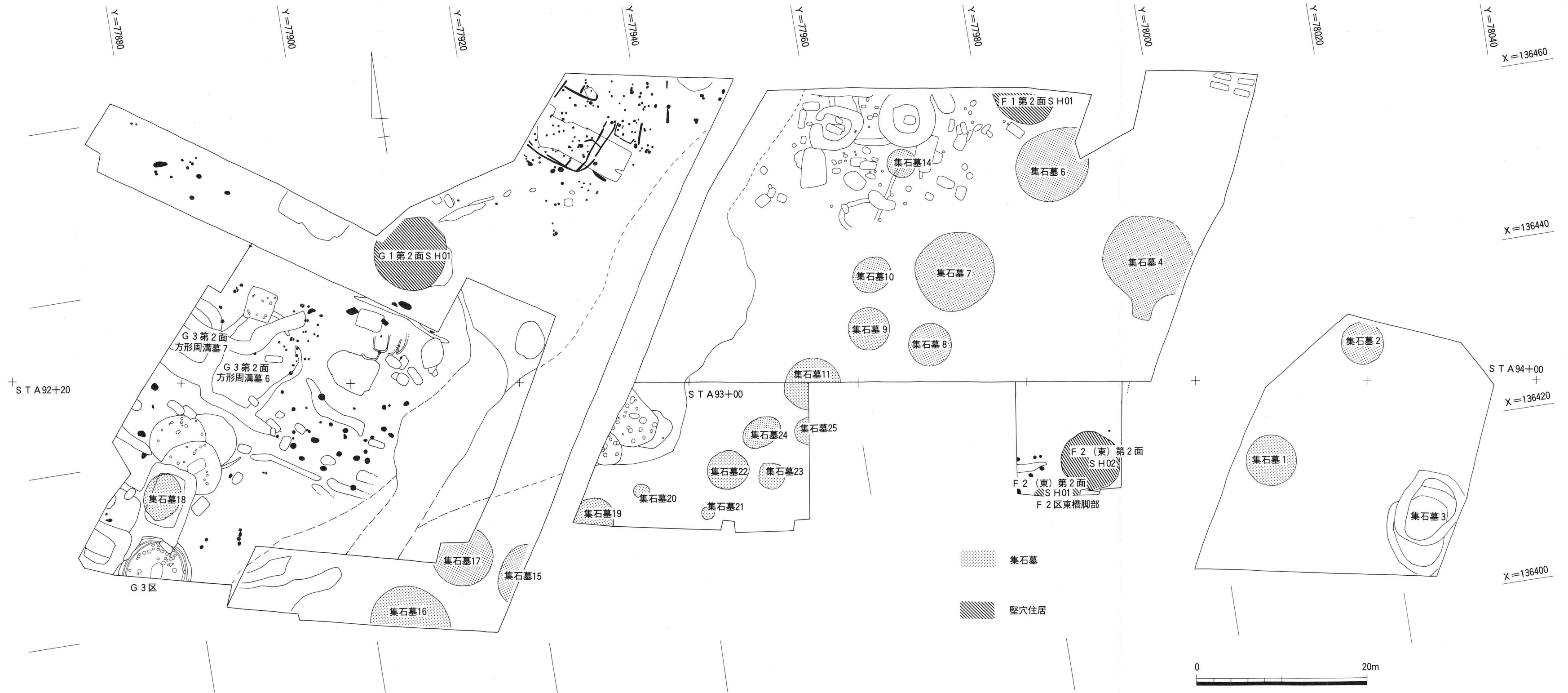


G3区第2面方形周溝墓7 調査区の北西部で検出した方形周溝墓である。周溝の外側で南北方

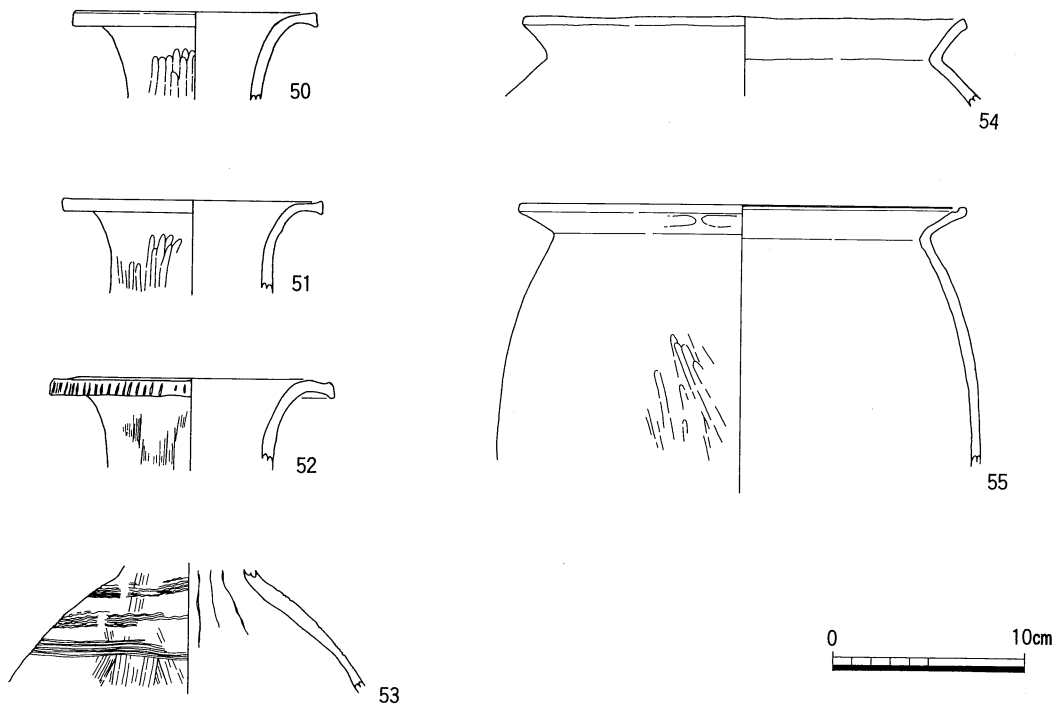
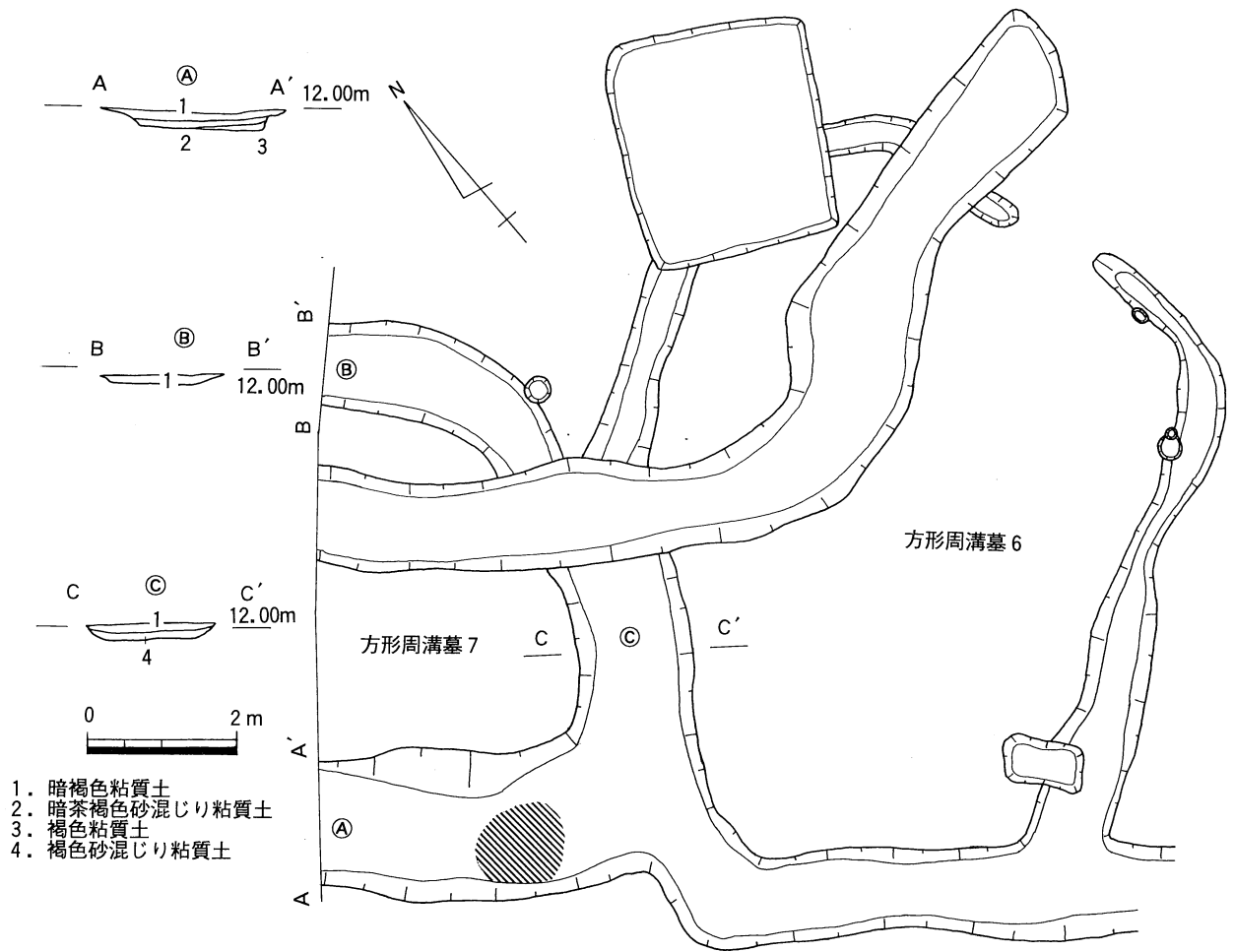
写真90 F2区東橋脚部第2面SH01(右)・SH02(左)



第98図 F2区東橋脚部第2面SH02平・断面図 (1/60)



第99図 E区~G区 第2面 遺構配置図 (1/400)



第100図 G3区第2面方形周溝墓7平・断面図，出土遺物（1/100）

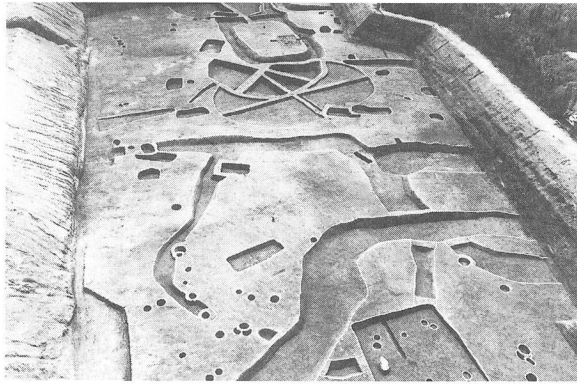


写真91 G3区第2面方形周溝墓群(北から)

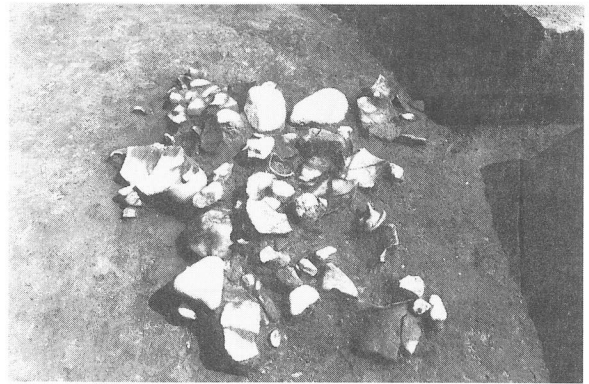


写真92 G3区第2面方形周溝墓7周溝内遺物出土状況(西から)

向で9.0m, 東西方向は西側部分が調査区外へ続くため全体は不明であるが検出部分で5.9mである。南東部分のコーナーはほぼ直角に曲がるが, 北東部分は丸みを帯びて曲がっている。また東側の周溝は東に隣接する方形周溝墓6と溝を共有している。周溝の幅は1.1m~2.4mで, 深さは20cm前後である。周溝の底部は南側部分が他より幾分深くなっており, 南東コーナー部分に供献土器と考えられる一群が出土した。墳丘は削平されており埋葬施設は検出されなかった。

50~52は壺の口縁部で大きく開く。53は櫛描き文を施した壺の体部である。

G3区第2面集石18 調査区の南西部分で方形周溝墓と重なって検出したものである。集石18が埋没した後に方形周溝墓を造営している。集石18の平面形は長径5.7m, 短径は現存で3.9mの南北に長い楕円形である。西側は方形周溝墓の周溝によって壊されており, 全長は不明であるが復元すると4.4m前後になるものと思われる。全体に盛り土によって塚状になっており, 高さは40cmほどある。地山面に3層分の盛り土を行い, 最上層には拳大の円礫・角礫が密集している。中には人頭大の礫も含まれている。

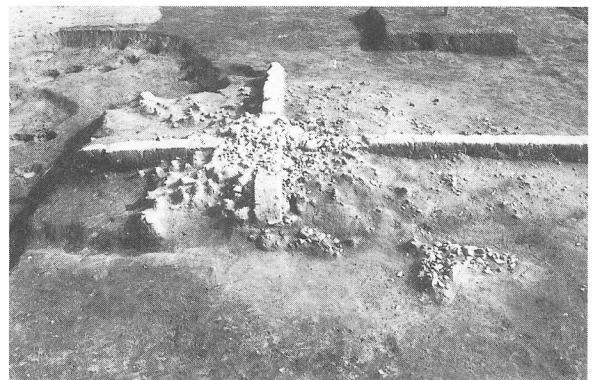
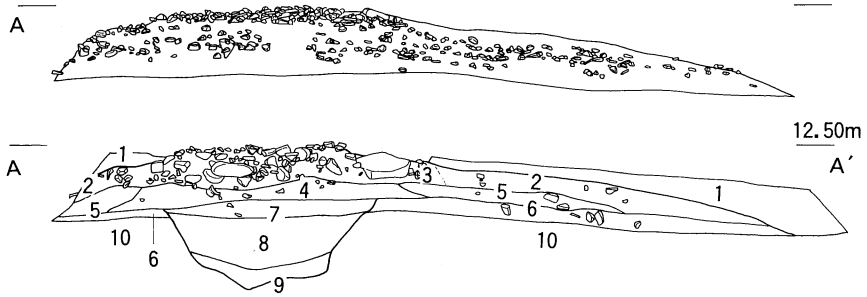
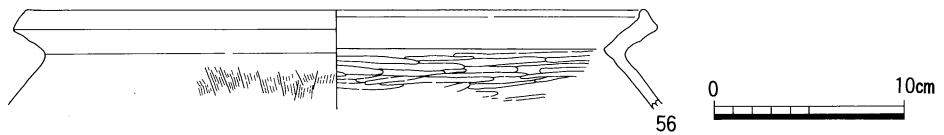


写真93 G3区第2面集石18検出状況(西から)

この礫群は墳頂部に集中して直径1.4mの円形に形取られており, 中腹から裾部にかけてはまばらである。またこの礫群は中央の部分で20cmほどの堆積がある。この礫群の中には弥生土器とサヌカイト片が含まれている。土器はいずれも破片で, 特に意図的に破碎されたとか供献されたという状況ではない。また下部遺構として土坑を1基検出した。土坑は地山面に7~8cmほど盛り土した部分から掘り込まれている。土坑の平面形は長楕円形で長径1.8m, 短径1.0mである。深さは45cmほどで埋土は3層に分かれ, 最上層には炭化物が含まれていた。また中間部分の埋土には粘土ブロックが混じっているなど一気に埋め戻された状況となっている。またこの土坑は上部の円形に形取られた礫群の真下に位置している。この土坑は確実に上部の墳丘とともに全体でひとつの遺構となっている。この土坑の性格により集石18の評価が分かれる。埋葬施設と考えれば全体で墳丘墓(集石墓)と考えられよう。しかし土坑の掘り込みが斜めで底部の平坦面が少ないなど積極的に埋葬施設とは評価しがたい面もある。また集石墓と比べて礫が墳頂部に集中するだけで, 圧倒的に少ない。



1. 褐色砂質土 0.1~0.5cm大の細礫含む
2. 茶褐色粘質土 1~3cm大の礫含む
3. 茶褐色粘質土 3~10cm大の礫多量に含む
4. 暗茶褐色粘質土
5. 4より少し固くしまり、弱干砂を含む
6. 暗茶褐色砂混じり粘質土
7. 暗灰褐色粘質土 炭化物含む
8. 暗灰茶色砂混じり粘質土 暗黄褐色粘質土と暗灰色粘質土のブロックを含む
9. 暗褐色砂質土 弱干粘質を帯びる
10. 暗黄褐色砂混じり粘質土 (地山)



第101図 G3区第2面集石18平・立・断面図(1/40),出土遺物(1/4)

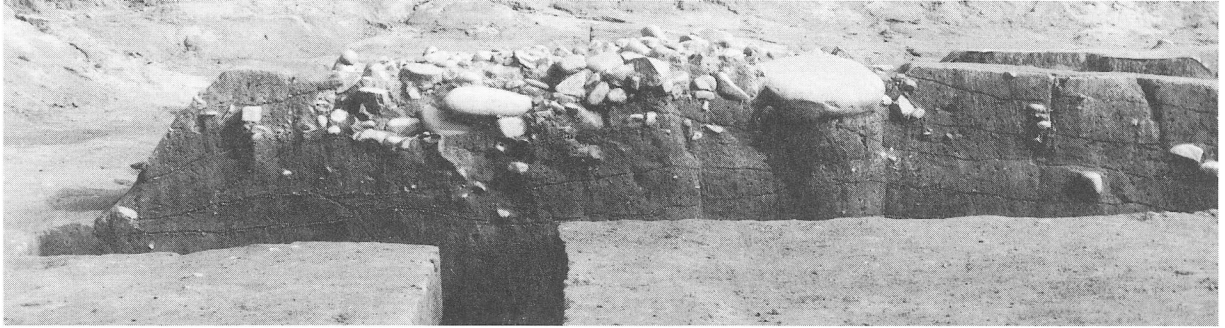


写真94 G3区第2面集石18断面（南から）



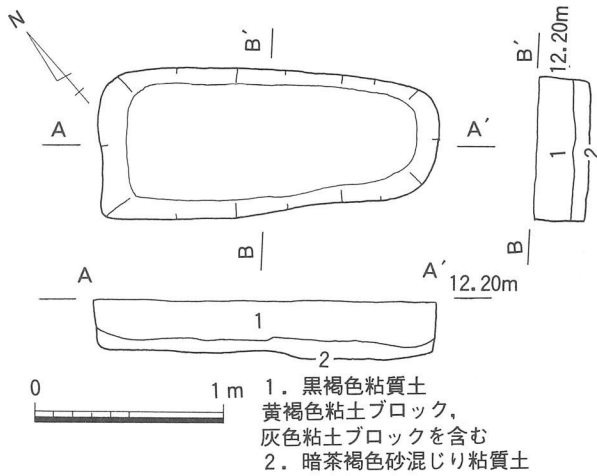
写真95 F2区西橋脚部第2面集石群検出状況（東から）

また遺物の出土量や出土状況も集石墓とは異なっている。現段階では下部に土坑を穿ち、その上部に盛り土による明らかな墳丘をもち、その上部に礫を充填する遺構と報告しておく。墳墓かどうか、また墳墓でなかったならばどのような性格の遺構かは本報告までの課題としておく。

F2区東橋脚部第1面SK02 調査区の北東隅で検出した土壙墓と考えられるものである。平面形は長方形であるが、東側の短辺が西側に比べて少し短くなっている。長辺1.80m、短辺0.75m、深さ28cmである。埋土は上下2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土が厚く堆積している。この層には黄褐色と灰色の粘土がブロック状に混入しており、一気に埋め戻された状況がうかがえる。また掘り形も直線的で急になっている。主軸を同じくする土壙がこの調査区で合計7基検出されており、規則的に配置された土壙墓と考えられる。土壙墓内から遺物は出土しなかったが、遺構の埋土の状況や周辺の遺構との関係から古墳時代のものではないかと考えられる。



第102図 E区~G区 第1面 遺構配置図 (1/400)



第103図 F2区東橋脚部第1面SK02平・断面図(1/40)

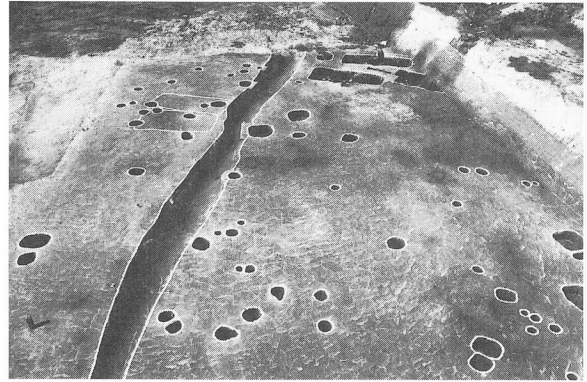


写真96 F2区東橋脚部第1面全景(南から)

F2区西橋脚部第1面SB01 調査区中央やや南寄りで検出した梁間3間×桁行4間の掘立柱建物である。建物の平面形は長方形で梁間は3間で5.2m、桁行は4間で8.0m、建物面積は $41.6\text{m}^2 \div 12.6$ 坪となっている。建物の主軸方位は $N-29^\circ-E$ である。柱穴は直径10~15cmの円形で、埋土は茶褐色粘質土の単一層である。柱痕は検出されなかった。柱穴内から遺物は出土しなかったが、概ね中世の建物と考えられる。

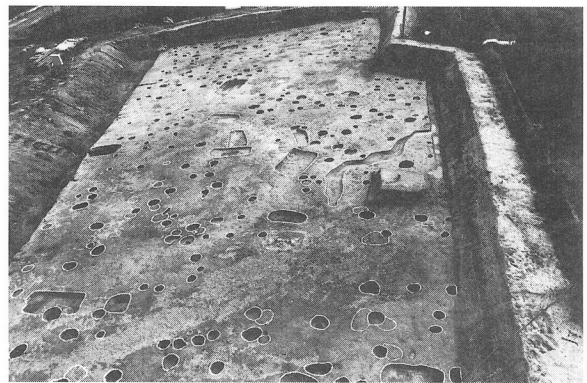


写真97 G3区第1面全景(北から)

G3区第1面SB01 調査区の南端で検出した梁間3間×桁行4間の掘立柱建物である。建物の平面形は長方形で梁間は3間で4.8m、桁行は4間で6.6m、建物面積は $31.7\text{m}^2 \div 9.6$ 坪となっている。建物の主軸方位は $N-25^\circ-E$ である。柱穴の平面形は円形で、直径12~50cmで、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。柱痕は検出されなかった。また東側から2列目の梁行と北側から2列目の桁行には束柱が認められる。柱穴内から遺物は出土しなかったが中世の建物と考えられる。

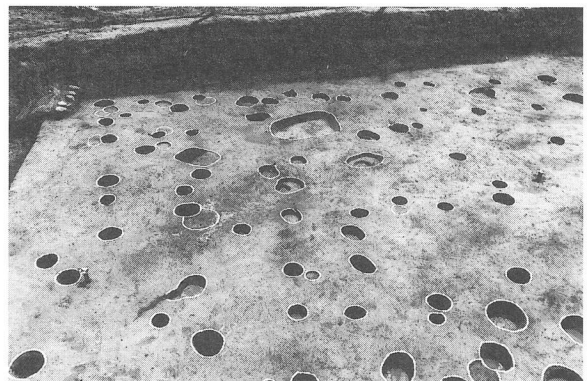


写真98 G3区第1面SB01(北から)

西側調査区(E区~G区)のまとめ

第1遺構面では主に中世の掘立柱建物群を検出した。明瞭な区画施設などは検出されなかったが、2~3棟でまとまって屋敷をかまえ、F2区からG3区にかけていくつかの屋敷地を構成していたものと考えられる。

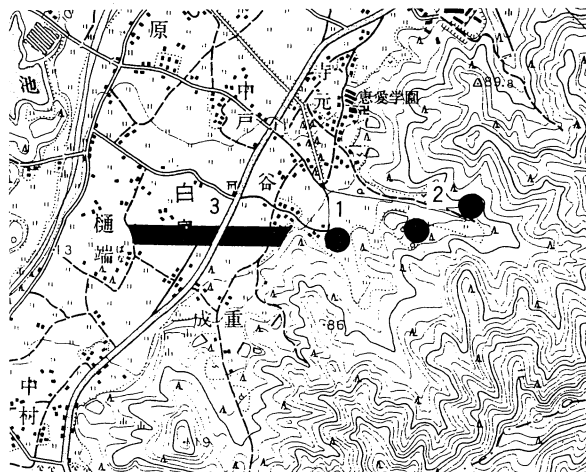
第2遺構面では、弥生時代中期中葉~後半を中心とする墳墓群と竪穴住居を検出した。墳墓は昨年度と同様に集石墓と考えられるもの(あるいはそれに類するもの)と、加えて今年度の調査では方形周溝墓を8基検出した。墳墓のみならず竪穴住居も10棟ほど検出しており、成重遺跡全体で大規模な集落と墓域を検出したことになる。

善門池西遺跡

1. 立地と環境

善門池西遺跡は大川郡白鳥町白鳥谷に所在し、地形的には尾根に挟まれた谷地形に立地している。山裾部に当たるため調査対象地の標高は約20～22mと幅がある。本遺跡は昨年度からの継続調査であり、その結果、弥生時代及び中世・近世の遺跡であることが判明している。

周辺の遺跡としては、弥生時代中期の集落を中心とする池の奥遺跡が東方に隣接し、西方には弥生時代中期の集石墓等の墳墓を中心とする成重遺跡が存在する。



1. 善門池西遺跡 2. 池の奥遺跡 3. 成重遺跡
第104図 遺跡位置及び周辺遺跡(1/25,000)

2. 調査の成果

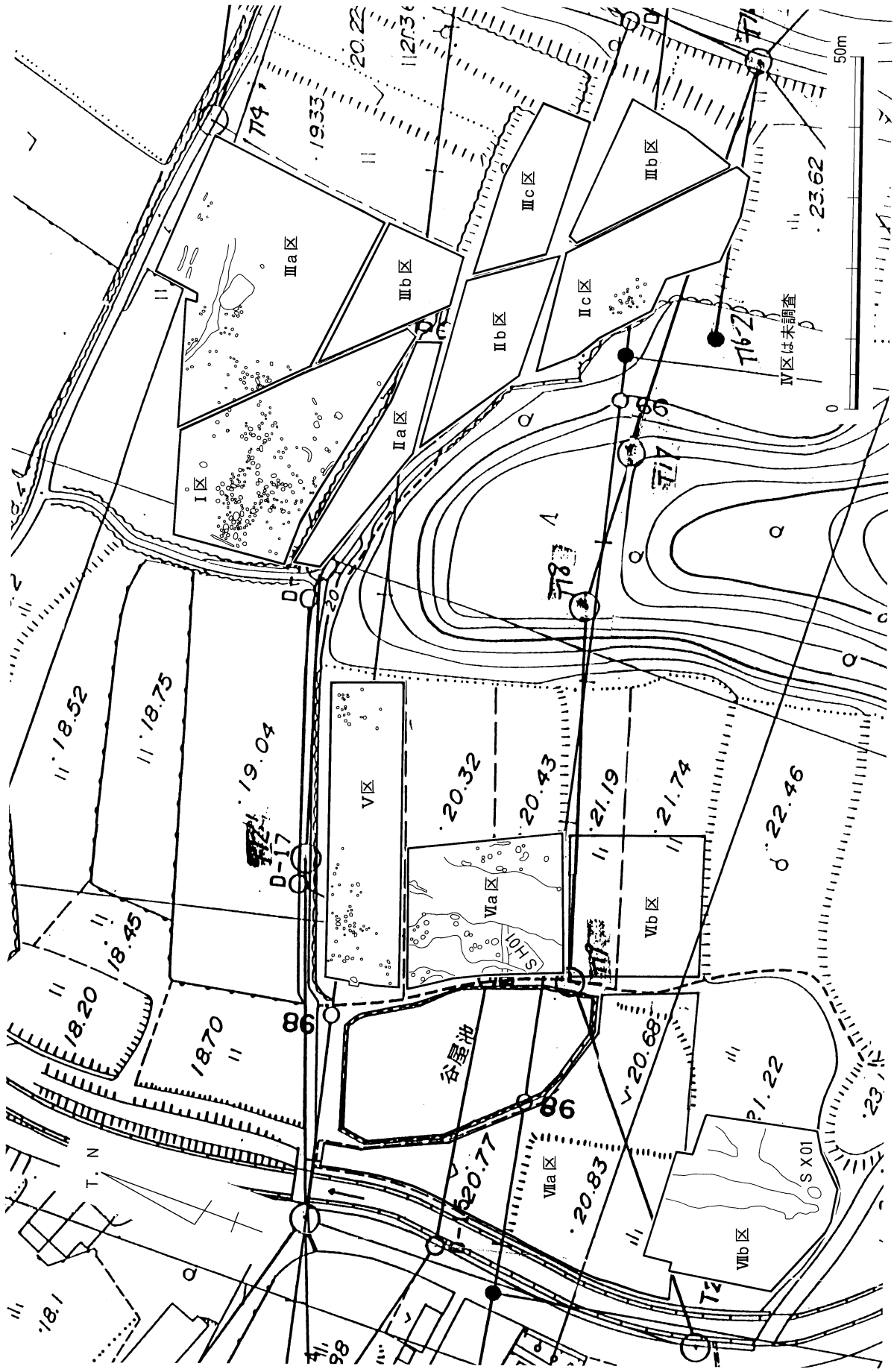
本年度調査は昨年度からの継続調査であることから、昨年度までの地区名を踏襲して調査を実施した。調査対象地は2500㎡で、隣接するため池の東側をⅥ区、西側をⅦ区とし、さらに調査工程の便宜上それぞれの北側をⅥa区・Ⅶa区、南側をⅥb区・Ⅶb区と分けした。1月現在の段階でⅥb区とⅦa区は調査が終了していないため、今回はⅥa区とⅦb区についてのみ述べる。Ⅵa区Ⅶb区ともに調査区中央において南北方向に延びる土石流跡を検出した。この中にはかなり大きな石も多数含まれるが、遺物はほとんど含まれておらず、そのためこれらの土石流の時期については不明である。

①Ⅵa区

対象地北東部に位置する調査区である。元々の地形は南から北にかけて緩やかに傾斜しており、調査前までは水田耕作のために階段状にされていた。ここでは土石流が調査区中央を南から北に向かって流れており、その両側において竪穴住居1棟、溝4条、柱穴などを検出した。また遺物としては表土掘削時に永楽通宝が1点出土している。

S H01 Ⅵa区の南西部で検出した竪穴住居である。西端の一部が調査区外に出ているが、平面形は長辺、短辺ともに約4.5mの隅丸方形であり、検出面からの深さは平均して約0.5mを測る。出土遺物としては須恵器の杯身・杯蓋、その他土圧により完全に押しつぶされているが、本来は一個体であったと思われる土師器の甑がある。杯身のかえし部のたちあがりの形状から6世紀半ば頃のものと考えられ、おそらくこの竪穴住居も同時期のものであろうと推測される。

S D01 Ⅵa区の西部で検出した南北方向に延びる溝である。検出長15.5m、幅0.7～5.0m、深さ0.1～0.7mを測る。断面は皿状を呈し、埋土はほぼ4層に細分できるが、一様ではなく時期を違えて埋没したと予想される。時期的には近世の土釜などが出土していることからこの時期のものと考えられる。溝の西部が調査区外に出ていることと南部の規模が極端に小さくなっていることから、小溝が大溝に合流している、あるいは小溝が大溝に切られているという可能性も高く、今後検討していかななくてはならない。



第105図 調査区割図及び遺構配置図 (1/800)

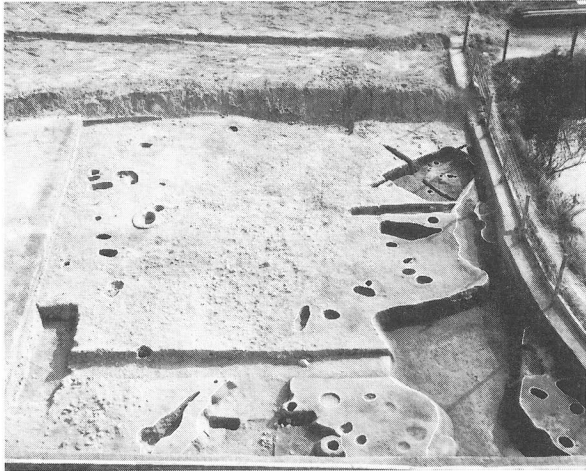


写真99 VIIa 区全景（北から）

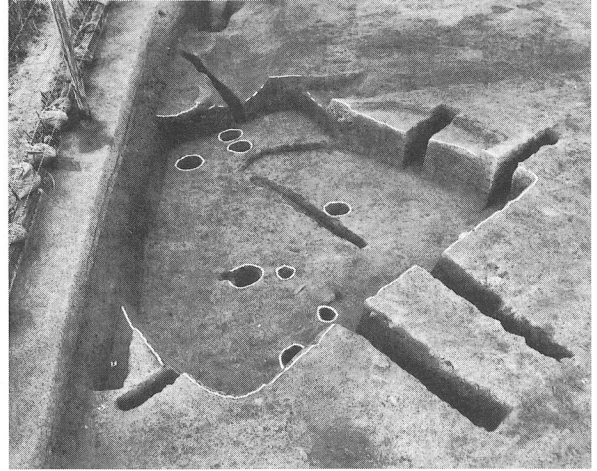


写真100 SH01（南から）

② VIIb 区

対象地南西部に位置する調査区である。耕作土の下には厚い砂礫層が堆積しており、地表面から約1.2m掘り下げたところで遺構面を検出した。この調査区も本来は北に向かって緩やかに傾斜しており、水田耕作のために南側を削って造成しているのが壁面土層から確認できる。ここでは土石流が調査区中央を南から北に向かって3条流れているのが確認できた。遺構としては調査区南端においてSX01を検出した。本調査区で検出された遺構はSX01のみである。

SX01 VIIb 区の南端で検出した平面形が楕円形の石組み遺構である。平らになるように石を敷き詰め、それらを囲うように大きめの石を周りに配置した作りとなっている。周囲に配置された石の内のいくつかは内側に被熱した跡がある。規模は南北1.7m、東西1.3mである。埋土は暗灰黄色粘性細砂質土と暗灰色粘性砂質土で、それらの間に炭化層が入り込んでいる。出土土器はなく現在のところ時期、性格とも不明である。

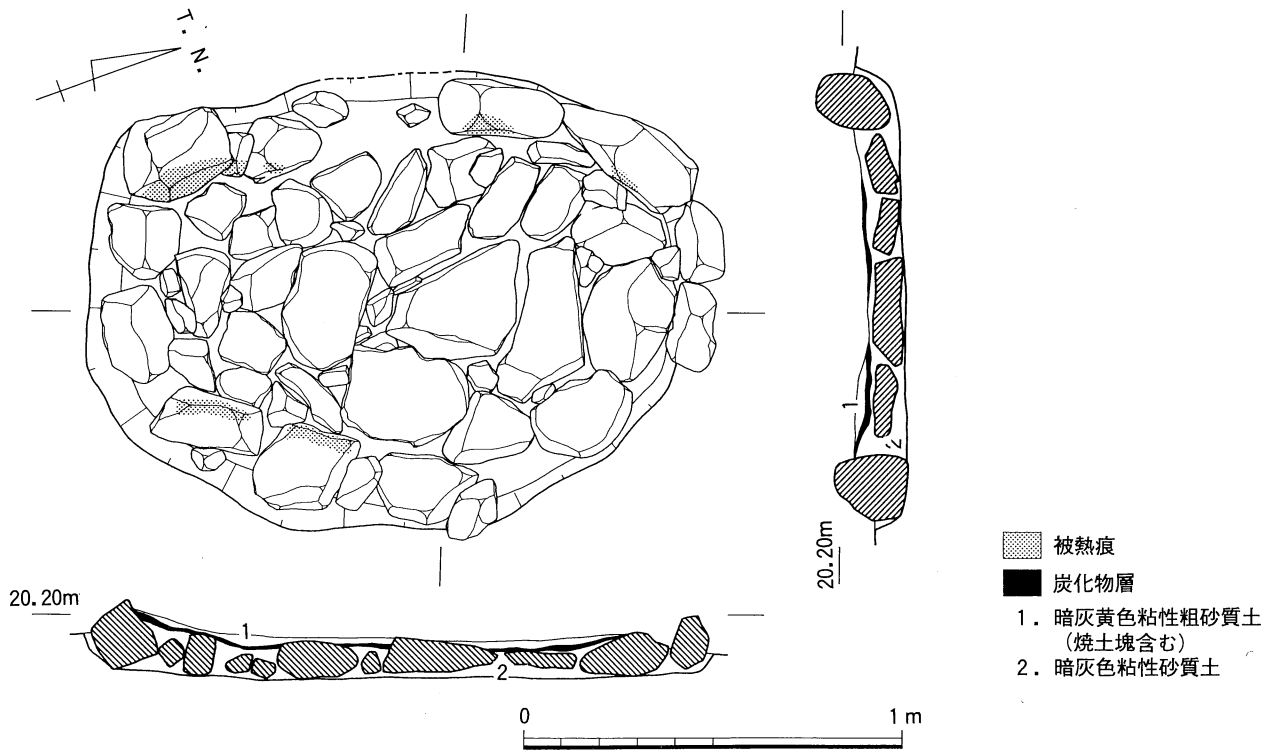


写真101 SX01（東から）

3. まとめ

本遺跡は現在もなお調査中であるため報告も現段階までのものとなるが、現在までの成果としては、古墳時代の竪穴住居を1棟検出することができた。また現在調査中のVIIa区においても弥生時代と古墳時代の竪穴住居を少なくともそれぞれ1棟ずつ検出している。詳細な時期等については今後の調査の結果が待たれるが、昨年度の調査では住居跡は検出されていないため、今回の調査は谷地区における集落の展開、変遷を知る上で重要な資料となるものと思われる。集落については近隣の池の奥遺跡、成重遺跡等の成果も合わせて検討していきたい。

今後の課題としては、VIIb 区のSX01の時期、性格を明らかにすることであろう。出土遺物が存在しないため手がかりは極めて少ないが、本遺跡が弥生時代から近世までというかなり広い時期幅を持つだけに何とか手がかりをつかんで時期を比定したいと考えている。



第106図 SX01平・断面図 (1/20)

池の奥遺跡

1. 立地と環境

遺跡は、白鳥町白鳥字谷及び字久詰の山麓の、東谷川を挟んで対峙する東西2箇所の谷部に分散して立地する(第104図)。各谷部は、開口部の幅が約50m、奥行きが約50mの狭隘な地形であり、開口部に東谷川の浸食による段丘崖様の地形が認められることから、遺跡の範囲は各谷地形内部において、完結することが想定できる。

ところで、本遺跡の周辺地域における遺跡の分布については、『白鳥町史』と本概報シリーズ平成9年度版に詳しいことから、詳述を避け、隣接する弥生時代の遺跡群との関連についてのみを概観することにする。

まず、近接する最大の遺跡は成重遺跡である。同遺跡においては、弥生時代中期から後期までの居住遺構と埋葬遺構が共存するとともに、多様な埋葬遺構が混在する点に特徴をみることができる。しかしながら、これらの特徴については、当該地域の平地部に立地する集落跡の普遍的な様態とみなすことができないため、本遺跡のように丘陵裾部あるいは山麓に立地する集落跡との直接的な比較作業を行うことは難しい。ただし、近接した位置関係にあることを重要視すると、両遺跡が相互に影響を及ぼしたことは十分に推測することができるであろう。

また、詳細は明らかではないが、成重遺跡に近接して成重北遺跡と四房遺跡の存在が知られていることから、当該地域の平地部においては、広い範囲にわたる弥生時代の集落遺跡の存在が予見でき、立地条件の差異にもとづき、集落の様態の差異を抽出することが必要となると考えている。

さて、本遺跡が立地する山塊の山間部あるいは山麓部における当該時期の遺跡の存在については、未知の点が多いが、本遺跡の西部に隣接する善門池西遺跡の東側谷部において検出された弥生時代の遺構群と、同部の埋積土中に包蔵されていた同時期の遺物は、当該地形に立地する遺跡の様態を明らかにするための比較資料として有効であると考えられる。すなわち、各谷地形は、奥行きが短いために、緩斜面地が狭小である上に、開口部に段丘崖様の地形が存在するために、居住に適当な地域は同地形内部の極めて狭小な地域に限定されてしまうのである。したがって、1谷地形単位で1集落の存在を想定することが妥当であると考えられるのである。

2. 調査の成果

(1) 調査の経過と方法 本遺跡については、『白鳥町史』において「千光寺池の奥遺跡」として記述をみることができ、従前から弥生土器、打製石鏃、磨製石斧、紡錘車等が採取されていた。ところが、多くの遺物の出土にもかかわらず、本格的な発掘調査が行われることがなかったために、遺跡の範囲、性格等の詳細については全く不明であった。

ところが、平成9年11、12月に実施した予備調査により、善門池東方と東谷川東岸の農地において、弥生時代中期を主体とする遺跡の存在が判明したため、8,700㎡の範囲について本格的な発掘調査を実施することが決定した。

調査期間は、本年度6月から3月までであり、調査の方法は、工事請負方式を導入した。

調査の対象とした地域は、上記のとおり、善門池東方の水田と果樹園に開墾されていた段状の平坦地と、東谷川東岸の一部が果樹園として開墾されていた緩斜面地であるが、便宜上、前者を「I区」、後者

を「Ⅱ区」と呼称することとし、さらに前者を「A区」～「C区」の3区画、後者を「A区」と「B区」の2区画に区分して調査を進めた。

そして、遺跡の中心に該当すると考えられる地域を優先して調査を行ったために、ⅠA区→ⅠC区→ⅡA区→ⅠB区→ⅡB区の順序となった。

(2) 土層序 遺跡地は、広義の谷地形に分類することができるが、微視的には、小規模な尾根地形が内在することが判明した。このため、河川跡の埋没位置に相当する原初的な谷地形部分においては、複数の土壌が厚く堆積しているものの、尾根地形部分においては、表土直下に基盤層を検出することが可能であることを知り得た。

特に、谷地形部分における基本土層序をみると、第1層：表土。水田・果樹園の耕作土及び造成土、第2層：弥生時代中・後期の遺物を包蔵する黒色系の砂質土壌、第3層：遺物の包蔵量が少ない、河川の氾濫により形成された白色系の砂質土壌、第4層：弥生時代中期の遺物を包蔵する黒色系の砂質土壌。遺構の覆土、第5層：遺構の基盤土に大別することができる。

なお、本遺跡の堆積状態について特筆できる知見としては、河川の流水によって運搬されたことが推測できる、粒子の大きい砂の量が多いことと、大型の岩石が相当量混在することを指摘することができる。すなわち、これらの事実については、当該地域の小河川が現状においても土石流の危険地帯に認定されていることを考慮すると、その歴史的な経過を明らかにする資料と考えることができるのである。

(3) 遺構の検出状態 本稿においては、平成10年12月までに調査を終えたⅠA区、ⅠC区、ⅡA区の成果について報告したい。

検出した主要な遺構には、竪穴住居跡、柱穴跡、土坑、自然地形跡（河川跡、谷地形跡）があるが、調査対象地のほぼ全域が農地として利用されていたために、遺構の遺存状態は不良である。とりわけ、ⅠA区とⅠC区は、基盤土までの深度が小さい上に、段状に開削されていたために、旧地形の傾斜地の奥方向の遺構の遺存状態が悪くなっている。

さて、Ⅰ区においては、A区全体とC区西部を中心とする生活遺構群と、C区東半部における河川跡の存在が特筆できる。

前者には、竪穴住居跡14基が含まれることから、東谷川西岸部における集落跡の中心部分であると考えられる。そして、柱穴跡については、今後の図上操作により、竪穴住居跡あるいは掘立柱建物跡を復元することが可能になると考えられることから、建物遺構の数量は増加することが予測される。

本稿執筆段階においては、各遺構の共存及び先後関係については明言することができないが、採取することができた遺物には、弥生時代中期中葉頃から同後期初頭頃に比定できる資料が認められることだけは報告しておきたい。

後者は、現在の東谷川に近接した位置関係にあるとともに、酷似した流路の方向性を示していることがわかる。すなわち、同河川の流路が固定される前段階においては、河川の一部を形成していたことが想定できるのであるが、遺構の規模が小さいことを考慮すると、本流から分岐した小河川であると考えることが適当であろう。

次にⅡA区における主要遺構は、谷地形跡と周辺部の9基の竪穴住居跡群に代表される。特に、現在においても調査地の大部分が谷地形を呈していることから、検出した自然地形跡はその形成と埋積の経過を示す資料として重要視したい。

また、竪穴住居跡については、検出地点が調査地南西部の緩斜面に集中し、東谷川東岸部において小

規模な集落域を形成することがわかる。その規模は、西部の集落跡のそれに比して小さいが、同時期に河川を挟んで対峙した状態が想定できる。なお、当該地区の竪穴住居跡群中には、平面形態が正方形を呈する遺構1基が含まれていることが判明している。

(4) 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

S H01

(1) 形態と規模 I A区の西端部において検出した竪穴住居跡である。遺構の北半部分が後世の造成工事などで削平を受けているが、原形は円形の平面形態を呈していたと推測される。

規模は、検出面から床面までの深さが10cm～30cmで、長径は約680cm、短径は320cmを復元することができる。

(2) 構造 住居跡の南部で30cm～60cm程度の平らな自然石を敷いた土坑を検出した。その形態は長径170cm、短径140cmの長方形を呈している。内部に炭化物と焼土がみられたので炉跡であると考えられる。その左右には支柱穴を構成していたと思われる柱穴跡がある。

東部には幅30cm～50cmの壁溝が遺存する。

(3) 遺物の遺存状態 埋土からは甕形土器の小片が出土した他、サヌカイト剥片もみられる。

S H04

(1) 形態と規模 I A区においてS H06の南西10mの地点で検出された遺構である。平面形態は円形を呈している。規模は直径650cm、検出面から床面までの深さは10cmを測る。

(2) 構造 床面のほぼ中央部で長径100cm、短径60cmの炭化物と焼土を含んだ土坑を検出した。炉跡であると考えられる。

支柱穴は、それを中心としてほぼ長方形に配置され、柱間距離は長辺300cm、短辺200cmを測る。

(3) 遺物の遺存状態 弥生土器の小片とサヌカイト剥片の他、叩石を1点採取した。

S H05

(1) 形態と規模 I A区においてS H04の東部に隣接する地点で検出した遺構である。検出面と床面の高さが等しいため形態は判然としないが、柱穴跡の検出状況から、中央土坑を中心とする直径6m程度の円形の平面形態を呈する竪穴住居跡と推定される。

(2) 構造 中央土坑は炉跡であると考えられるが、支柱穴の構成は前述の形態と規模を想定した場合、中央土坑を中心としてほぼ長方形に配置されており、柱間距離は長辺210cm、短辺190cmを測る。

(3) 遺物の遺存状態 埋土から壺形土器の小片とサヌカイト剥片を採取した。また、土製紡錘車1点が出土している。

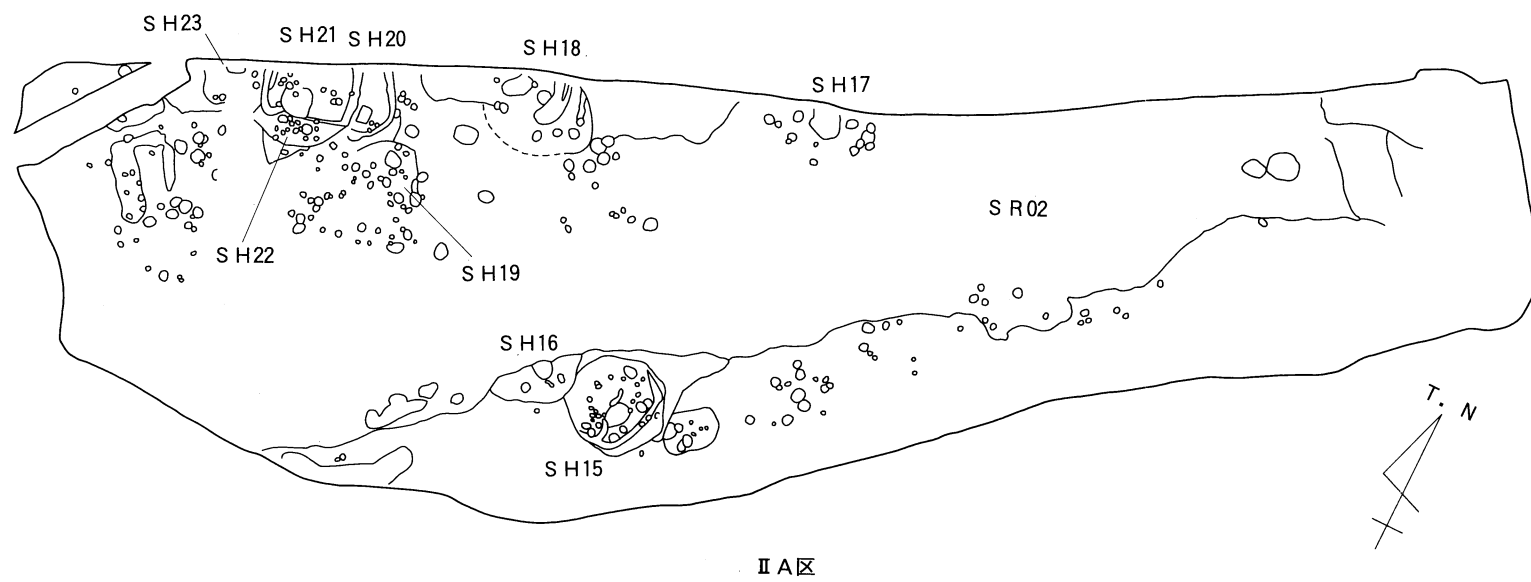
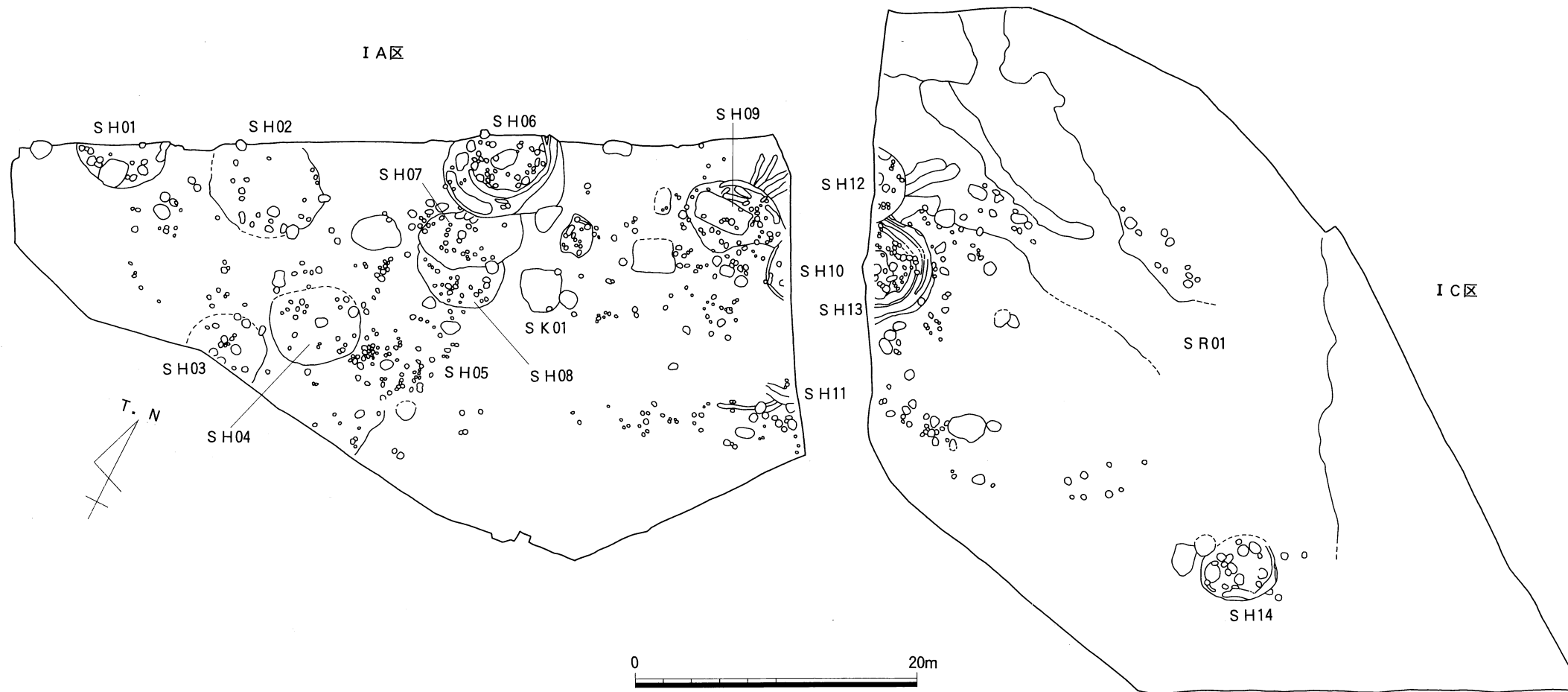
S H06

(1) 形態と規模 I A区北部において検出した。遺構の北部が後世の造成工事などで削平を受けているが、原形はやや歪んだ円形の平面形態を呈していたことがわかる。

規模は、東西径が880cm、南北径550cm、検出面から床面までの深さは40cm～50cmを測る。本遺跡における最大規模の竪穴住居跡であり、集落のほぼ中央に位置する。

(2) 構造 床面のほぼ中央部には直径約120cm、深さ70cmの炉跡が認められる。

支柱穴は、床面のほぼ中央の炉跡を中心として六角形状に配置されており、柱間距離は約210cmである。



第107図 IA・C区, IIA区遺構配置図 (1/400)

住居跡の南半分に浅い壁溝が存在する。壁溝と壁面の間は数個の柱穴跡がみられるが、全体的に緩斜面であり、生活面として利用されたとは考え難い。

また、床面の一部で炭化材がみられたが、床面全体には広がっていないので焼失家屋とは判断できない。

(3) 遺物の遺存状態 埋土からは壺形土器、甕形土器、高杯形土器の小片やミニチュア土器が1点、土製紡錘車1点などが出土している。石器では、打製石鏃4点、打製石錐3点、打製石庖丁3点、柱状石斧1点などを採取している。

S H09

(1) 形態と規模 I A区の東端部で検出した遺構である。南部の一部では検出面と床面が同じ高さになり、住居跡の平面形態は確定できないが、東西に長い楕円形を呈していると想定できる。

規模としては、南北径520cm、東西径730cm、検出面から床面までの深さは10cm～30cmを測る。

(2) 構造 床面の中央部に床面の約半分を占める最大径400cm、深さ20cmの土坑が検出された。その北側に80cm～190cmの長さを持つ溝が数本みられる。これらの溝が何に使われたのかは不明である。それとは別に壁溝もみられる。

また、住居跡の北側に向かう溝を4本検出した。

柱穴跡は東部と南部に集中して検出したが、先に示したように南部での住居跡の形が確定できないため、支柱穴を構成する柱穴跡かどうか判断できない。

(3) 遺物の遺存状態 埋土からは弥生土器の小片の他、壺形土器の底部と甕形土器の口縁部が出土している。

石器ではサヌカイト剥片の他、叩石と蛤刃石斧1点を採取した。

S H12

(1) 形態と規模 I C区の西端部において、S H13の北側に隣接する位置に所在する。I A区との間にある道路のため半分しか検出できなかったが、平面形態は楕円形を呈していると考えられる。

規模としては、長径500cm、短径190cm、検出面から床面までの深さは10cm～20cmを測る。

(2) 構造 床面の西端で炉跡と思われる土坑を検出した。それから1.3mの距離にある柱穴跡3基が、支柱穴を構成すると推測される。

(3) 遺物の遺存状態 埋土から少量の弥生土器小片とサヌカイト剥片を採取したのみである。

S H13

(1) 形態と規模 I C区の西端部において検出された遺構である。I A区との間にある道路のため半分しか検出できなかったが、ほぼ円形の平面形態が復元できることは容易に想像できる。

規模については、検出面から床面までの深さが10cm～20cmで、長径770cm、短径420cmを測る。

(2) 構造 壁面にそってほぼ平行に2本の壁溝が存在し、全周していると想定できる。

また、内側の溝から50cm離れたところにある3つの切り合った柱穴跡のいずれかが支柱穴を構成すると考えられる。

(3) 遺物の遺存状態 埋土中から壺形土器の頸部1点を含む弥生土器片が出土している。石器では、サヌカイト剥片の他、打製石鏃3点、叩石2点がある。

S H15

- (1) 形態と規模 II A区東端部の東丘陵から続く緩斜面上で検出した。平面形態は円形を呈している。規模については、検出面から床面までの深さは6cm～60cmで、直径510cmを測る。
- (2) 構造 東から西への斜面上に建てられた竪穴住居跡なので、東側を掘り込んで水平を保っている。炉跡、柱穴跡などは全体的に東側に集中し、西側では比較的まばらにしか柱穴跡は検出されていない。主柱穴を構成していたと思われる遺構は、壁面からほぼ等距離にある直径50cmの柱穴跡4基と直径30cmの柱穴跡2基の六角形状に配置された合計6基の柱穴跡である。
- (3) 遺物の遺存状態 埋土から少量の弥生土器片とサヌカイト剥片の他、磨石1点が出土している。

S H16

- (1) 形態と規模 II A区東部でS H15の西部に隣接する位置に所在する。自然河川跡S R02により西側を削取されているが、平面形態は直径550cm程度の円形を呈していると想定できる。また、検出面から床面までの深さは24～36cmを測る。
- (2) 構造 S H15同様、東から西への斜面上に建てられている。5基の柱穴跡を検出したが、主柱穴を構成するかどうかは不明である。その中で直径90cmを測る最大の柱穴跡は炉跡と推定される。
- (3) 遺物の遺存状態 埋土から高杯形土器の脚部と壺形土器の底部を各1点採取した。

S H18

- (1) 形態と規模 II A区西端部で検出した遺構である。西部はII B区に埋没しているために検出できていないが、平面形態は楕円形を呈していると考えられる。規模としては、検出面から床面までの深さ10cm～50cmであり、南北径420cm、東西径約700cmを測る。
- (2) 構造 全体的に柱穴跡は北側に固まって検出しているが、主柱穴の構成については不明である。また、2本の溝がみられるが、利用目的は明らかではない。
- (3) 遺物の遺存状態 埋土から少量の弥生土器片とサヌカイト剥片が出土したのみである。

2 土 坑

S K01

- (1) 形態と規模 I A区において、S H06の南東4.2mの地点で検出した遺構である。平面形態はやや歪んだ円形を呈している。規模としては、検出面から床面までの深さは10cm～20cmで、南北径300cm、東西径320cmを測る。
- (2) 構造 床面は比較的平坦である。また中央部が被熱されていることを確認した。
- (3) 遺物の遺存状態 埋土からは壺形土器、高杯形土器などの小片の他、サヌカイト剥片が出土している。

主な出土遺物としては、完形の壺形土器2点の他、壺形土器の口縁部や底部、甕形土器の頸部、高杯形土器の脚部などがある。

また、ミニチュア土器も2点出土したが、その近くに焼土が確認された。

3 自然地形跡

S R01

I C区中央部を南東方向から北西方向へ流れる河川跡である。幅は約6.4m～約7.5mである。

また、S R01の東側では遺構の密度が極端に少なくなるので、S R01がI区における集落の東限であると考えられる。

埋積土中からは多量の弥生土器片とサヌカイト剥片が出土している。特筆すべき遺物としては、線刻画のある甕形土器の口縁部、壺形土器片5点、土製紡錘車1点、ミニチュア土器の底部1点、水差し形土器と考えられる土器の把手1点、石錘1点、打製石鏃4点、打製石庖丁2点、叩石3点、蛤刃石斧1点などの他、石器を製造する際の原料となる大型のサヌカイト剥片も出土している。

S R02

ⅡA区中央部を北東方向から南西方向へ流れ、現在の東谷川へ続く谷地形跡である。最大幅は約12mである。

SH16が本流路により損傷を受けていることから、住居形成以後に本流路ができたと考えられる。

埋積土中からは多量の弥生土器並びにサヌカイト剥片が出土している。特筆すべき遺物としては、線刻画のついた甕形土器、壺形土器、高杯形土器、ミニチュア土器5点、結晶片岩製柱状石斧6点、扁平片刃石斧1点、蛤刃石斧1点、打製石槍1点、打製石庖丁3点、打製石鏃8点、石錘1点、叩石4点、磨石2点の他、石器を製造する原料のサヌカイト剥片が出土している。

4 出土遺物

平成10年12月現在、出土した遺物の数量は、予備調査と本調査を合計して、遺物箱177箱に及ぶ。これらは、大部分が洗浄を終えていないために、内訳を報告することができないが、弥生土器と石器・石製品が相当数を占めることは明らかである。

まず弥生土器は、ⅠC区SR01とⅡA区SR02の埋積土中からの出土量が他を圧倒するが、これらは流路が生活遺構を破壊した際に混入したか、あるいは生活廃棄物として投棄された資料であるために、原形を保つ資料は少ない。したがって、遺存状態が良好な遺物は、ⅠA区SK01の底面において採取した壺形土器、小型壺形土器、鉢形土器以外には多くをみることはできない。

石器・石製品については、後にも触れるが、磨製石斧、打製石庖丁、同石鏃、同石槍、同石錐、石錘、磨石、叩石、台石の出土を確認することができる。正確な出土量の算出作業は向後を待つ必要があるが、とりわけ磨製石斧の出土量が多い点については、香川県内においても有数であると考えられる。

さらに、遺跡全体の多くの遺構内部と遺物包含層中から、きわめて多数のサヌカイトの小剥片が出土している事実を指摘しておきたい。これらは石器製作によって排出された、石材の残滓であることから、遺跡内部における石器生産の様態を復元する資料として重要であるだけでなく、本遺跡が当該地域における石器の生産・流通に果たした役割を明らかにするための手がかりとしても注意する必要があると考えている。

ところで、第109図は打製石槍の先端部を中心として、研磨（網目部分）を加えることにより、石剣に再加工した資料である。片面の一部には、鑄部分を観察することができる。材質はサヌカイトである。

その他の遺物としては、土製紡錘車が出土している。

3. ま と め

今後の報告書作成作業時における検討課題をいくつか指摘することにより、まとめにかえる。

(1) 集落の立地について 既に報告したように、検出した集落遺構は、東谷川を境界として2群に分離することができる。そして、地形的な制約により、同河川の流路が大きく変化していないことを想定するならば、これら2群の遺構群は個々に完結することにより、異なる集落跡を形成していたことを想定

することが可能である。

ところで、両者の集落跡の立地については、個々の範囲が東谷川へ流入する支脈が形成した、小規模な谷地形の内部において完結する点と、各谷地形の開口部(集落の出入口部分に相当すると考えられる)が、河川の浸食を被った結果、崖面状を呈したために、集落の前面の境界線が明瞭になっている点において共通している。特に、集落の前面が河川を介することにより、外部に接触する事実については、湊川流域の丘陵裾部に立地する集落跡の多くに共通する点であると考えられることから、河川が存在が集落間の交流を促進する要因となり得たのか、あるいは抑制する要素として作用したのかについて検証する必要があるであろう。

(2) 集落の様態について 堅穴住居跡は、Ⅰ区において14基、Ⅱ区において9基を確認することができる。この数量は今後いくらか増加することが予測できるが、各集落跡が立地する谷地形の規模が大差ないことを考慮すると、最終的に各地区における数量は近似した値に近づくことが推測できる。そして、両地区において、堅穴住居跡相互の重複関係と遺構間の距離を勘案すると、同時期に所在した遺構の数量についても3～5基程度であると考えることが適当であり、両者の規模に差異を見出すことは困難である。

また、各堅穴住居跡の位置関係については、谷地形のほぼ全体を占有する点において共通することがわかるが、これは狭隘な空間を有効に利用しようとする目的によって生じた結果であり、両集落跡の構造的な特徴であると指摘することができるであろう。したがって、平地部に立地する集落跡の多くが、使用目的により、空間を分離する特徴を有する事実と比較することにより、丘陵部の集落跡の構造的な特性を抽出することができると考えられる。

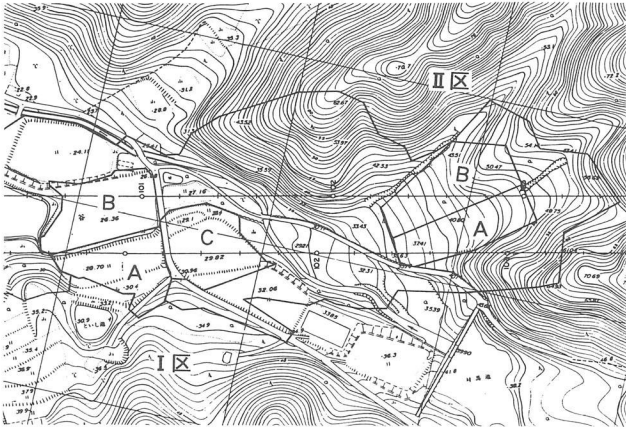
ところで、集落の存続期間を検討する上で、注意したい遺構として、Ⅱ区のSH21に触れておきたい。本遺跡において検出した堅穴住居跡は、同遺構が方形の平面形態を示す以外、全てが円形の平面形態であることが判明していることから、同遺構が集落の最終段階に位置する可能性を示唆しているのである。

(3) 石器の生産について 本遺跡の遺物面における最大の特徴は、多数の打製石器と磨製石器の製品と未製品、石器の製作に使用された砥石、台石などの道具類、石器の原材料となったサヌカイト原石、石器の製作過程において発生した膨大な数量のサヌカイト剥片の存在である。

とりわけ、サヌカイトを使用したの打製石器の生産の実態を考察するための資料が相当量含まれており、従前における弥生時代中期の集落単位の石器生産活動に関する研究成果を裏付ける事実として注意する必要がある。

しかも、資料は遺跡全体から出土する事実が判明したため、石器の製作場所が集落内部の特定の箇所限定されないだけでなく、製作者をも特定していなかった可能性について指摘することができる。

さらに、Ⅰ区とⅡ区の集落跡相互におけるこれらの資料の出土内容と数量の比較作業により、隣接する集落間において、石器の生産の様態に差異が認められるのか否かの検証を行うことが可能となり、当該地域における石器の流通を通じて、生業の実態の解明作業が進行することが期待できるのである。



第108図 池の奥遺跡地区割図

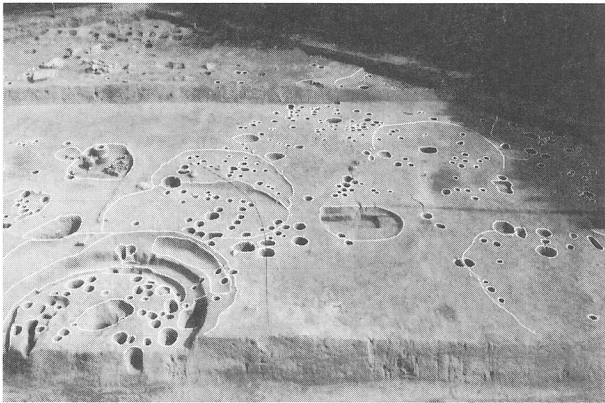


写真102 I A区 (北から)

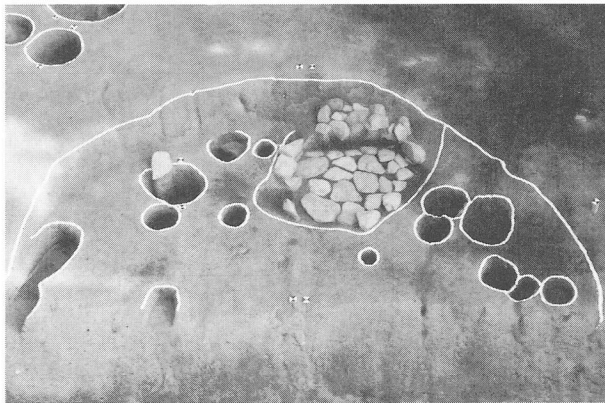


写真103 S H01 (北から)



写真104 S H13 (北から)



写真105 II A区 (南から)

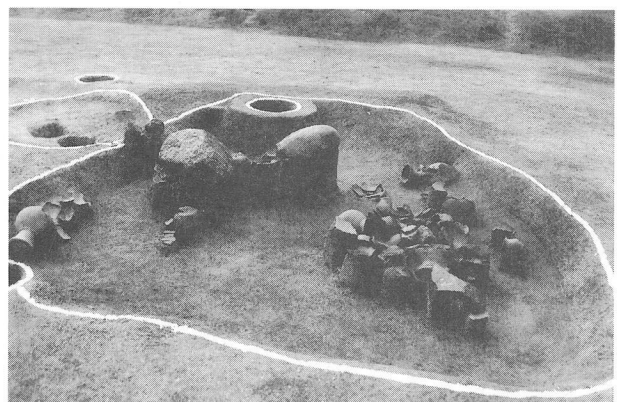
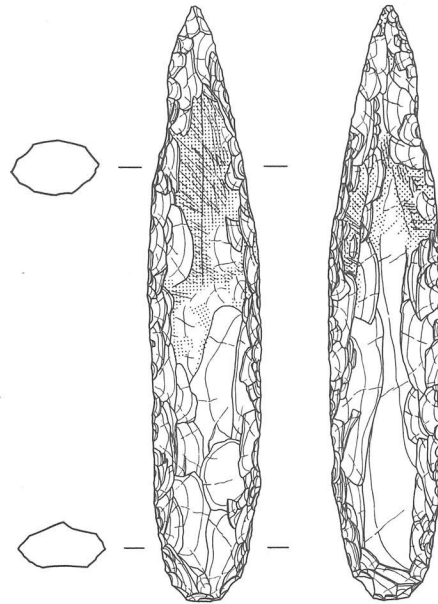


写真106 S K01 (北から)



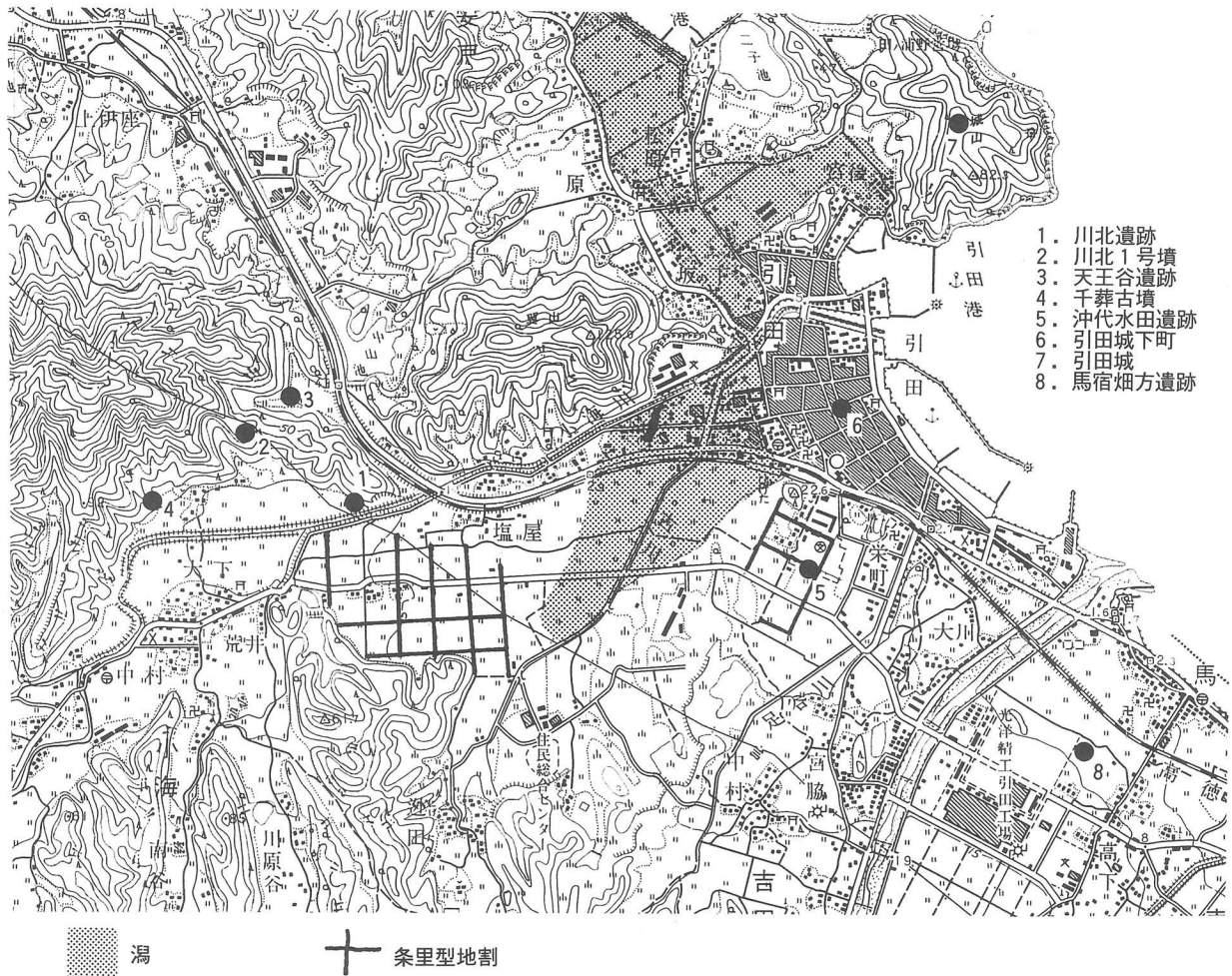
第109図 磨製石剣実測図 (1/2)

川北遺跡

1. 立地と環境

川北遺跡は、大川郡引田町小海字川北1019-1ほかに所在する。北側の標高60mほどの丘陵を背にし、小海川に面する沖積平野上に位置する。第110図によって地形環境を概観すると、弓なりの街路が特徴的な引田の集落は、馬宿川から瀬戸内海に流出した砂礫によって形成された砂嘴上に立地する。この砂嘴の背後に潟が形成されていた。潟は現在は埋積されたが低湿地であり、松原や宮後は江戸時代初期に塩田として開発されたことから、当時は海水の流入する状況であったことがわかる。

川北遺跡の北西300mほどの丘陵尾根には横穴式石室をもつ川北1号墳が所在する。また、西方には千葬古墳が所在するが内容は不明である。古代の官道である南海道は阿波国板野から大坂峠を越えて引田を通っていた。平安時代に編纂された「延喜式」には引田に馬家の所在を記しているが、位置は確認されていない。潟の推定ラインに接するように塩屋と沖代の2箇所に小範囲ではあるが条里型地割が認められる。沖代の条里型地割近辺では古墳時代後期の水田跡も検出されている（沖代水田遺跡）。遺跡の南の小海川は、直線的な流路をもつ人工河川である。遺跡の調査成果から流路固定は中世以降に行われたと考えられるが、現在は天井川となり、遺跡付近は排水不良の低湿地となっている。



第110図 調査位置と周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

2. 調査の成果

調査面積は4,220㎡で、調査期間は平成10年8月1日から平成11年3月31日までの予定である。4つの調査区に分割して調査をおこなっているが、Ⅲ区が現在調査中のため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区の概要を報告する。

(1) 堆積状況

Ⅰ区東部の土層堆積状況を模式的に示す。遺跡は標高6mほどに立地し、後述する奈良時代の遺構面は標高4.3m付近に立地する。中世段階の小海川は7層上面から掘り込まれると推定され、2～6層はそれ以降のもので、現河道に固定されて以降の後背湿地性の堆積層と考えられる。

(2) Ⅰ区の概要

奈良時代の集落跡を検出した。掘立柱建物跡12棟以上からなる。これらの柱穴は隅丸方形の掘形をもつものが多く、S B04は一辺1.2mを測る大型ものである。建物面積も40㎡近いもの(S B01、03、04)があり、相対的に大型建物の部類に属するものである。また、建物規模や柱間距離に近似するものがあり、建物の桁行や梁行の方向を揃えるものが認められる。建物は重複するものが多いが、柱穴からの遺物の出土が僅少であったため前後関係や同時期の建物群の抽出は今のところできていない。しかし、建物配置や規模には30cm前後の基準尺の存在が想定され、ほとんどの柱穴で柱痕を検出できたことから、使用尺の検討が可能と思われる。建物の前後関係の把握とともに今後の課題である。

遺構からの遺物の出土は少なかったが、包含層からは28ℓコンテナ約20箱分の遺物が出土した。須恵器と土師器が中心で、杯や皿などの食器類、煮炊き用や貯蔵用の壺や甕などのほか円面硯の破片、土錘、施釉陶器片などが出土している。須恵器は中村浩編年のⅢ形式からⅣ形式にかけての時期幅があるが、これらは同一の層位で出土位置も遍在する傾向にあり分離できていない。遺構出土の遺物の検討が課題となる。なお、実測図に掲げる緑釉陶器は調査区北東隅の柱穴から出土したもので、当該期の他の遺物は今のところ確認できておらず、性格付けの難しいものとなっている。

先に建物に方向を揃えるものがあることを記述したが、座標北から4度ほど西に振った方位が基準になっている。これは南に広がる条里型地割の阡陌の方向と合致し、真北でも磁北でもなく、この地域独自の方向であることから両者に関連がある可能性が高い。また、集落はⅡ区で検出された旧河道が西限となると想定されるが、巨視的には河道西側のⅢ、Ⅳ区のほうが微高地であったと考えられ、集落の性格を検討するために、周辺に広がる条里や微地形を視野に入れておく必要がある。



写真107 Ⅰ区全景（南から）

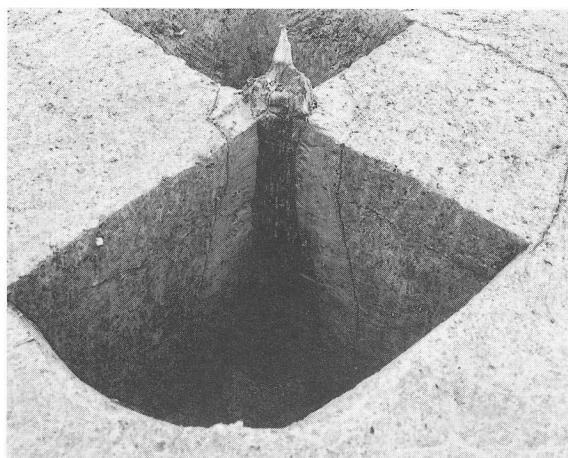


写真108 S B04・S P06断面（北西から）

(2) II・IV区の概要

IV区では古墳時代の遺物を包含する旧河道とその埋没後に掘削された数条の溝状遺構のほか数個の柱穴を検出した。旧河道は左岸が調査区外となり幅17m以上深さ1.2m以上の規模で、斜交するラミナや級化層理の見られる砂礫で埋積される。極めてまばらに弥生時代後期や古墳時代前期頃の土器片を包含する。S D07は幅2.5~4m深さ1mほどの規模で、径2cm以下の砂礫で埋積される。出土遺物は僅少で古墳時代前期頃の土師器などがあるが、下層の旧河道からの混入の可能性がある。S D01~04は切り合いが認められるものの近い時期に機能した溝状遺構である。幅0.5m深さ0.2mほどの規模である。出土遺物は僅少であるが、11世紀代の土師器碗の破片が出土している。なお、S D01の南半と02、03は周辺条里の方向に合致する。

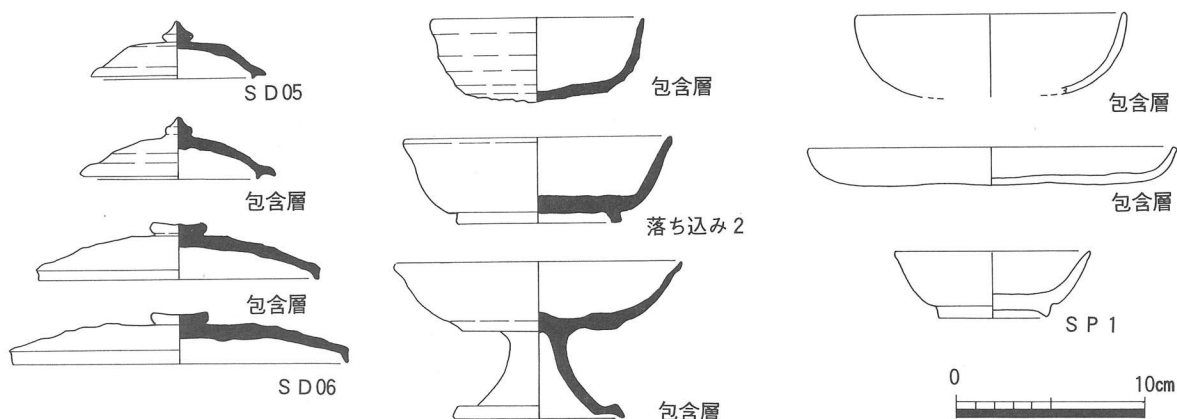
II区からは旧河道が検出された。これはIV区からの旧河道の延長にあたるものが埋没した後、中世頃の遺物を包含する新たな河道が開析して形成されたものである。幅17m深さ2.6mを測る。埋土は巨視的には一層で小礫をわずかに含む黄灰色シルトで埋積される。この層中に中世後半の遺物が包含されている。なお、河道の両岸には0.2~1.2m間隔で直立方向に杭が打たれ杭列となる。護岸遺構と考えられる。



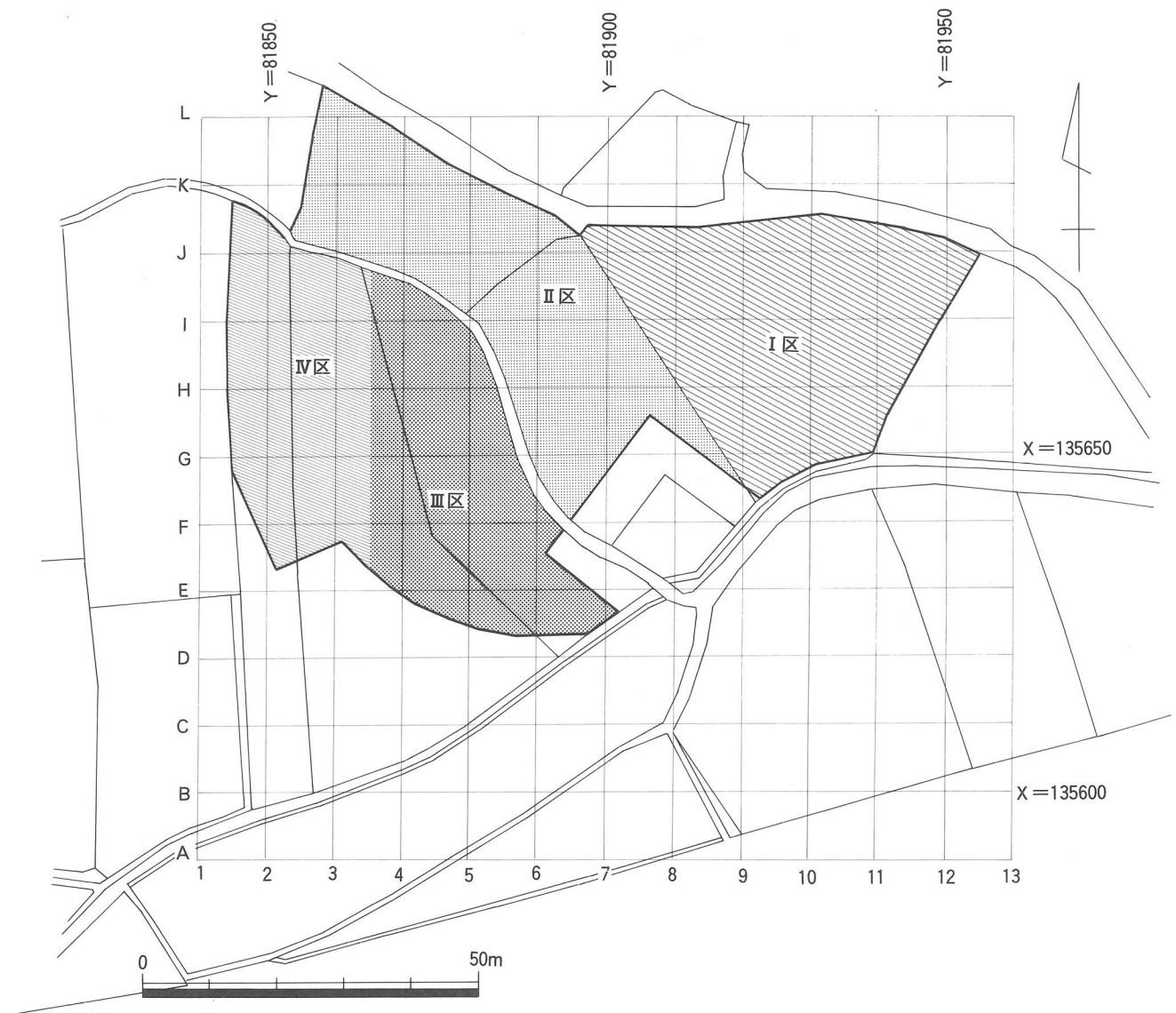
写真109 IV区全景 (南から)



写真110 II区全景 (北西から)



第111図 I区出土遺物実測図 (S=1/4)



第112図 調査区割およびグリッド図 (S=1/1,000)

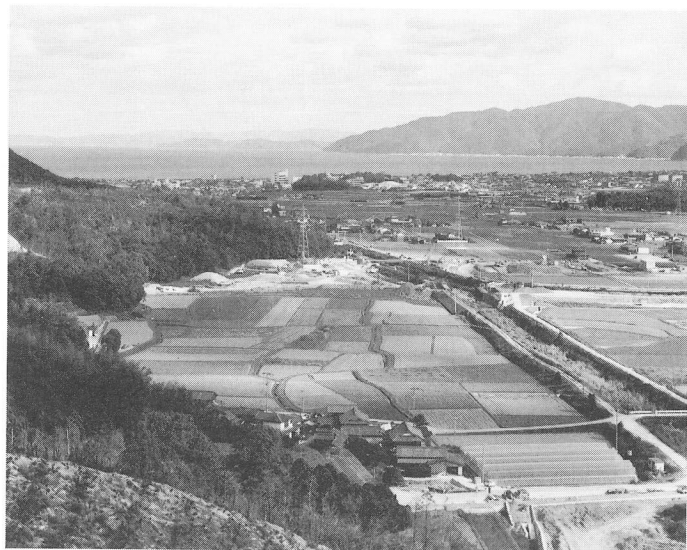
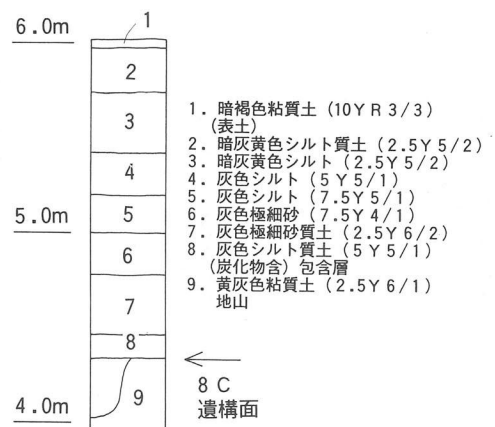
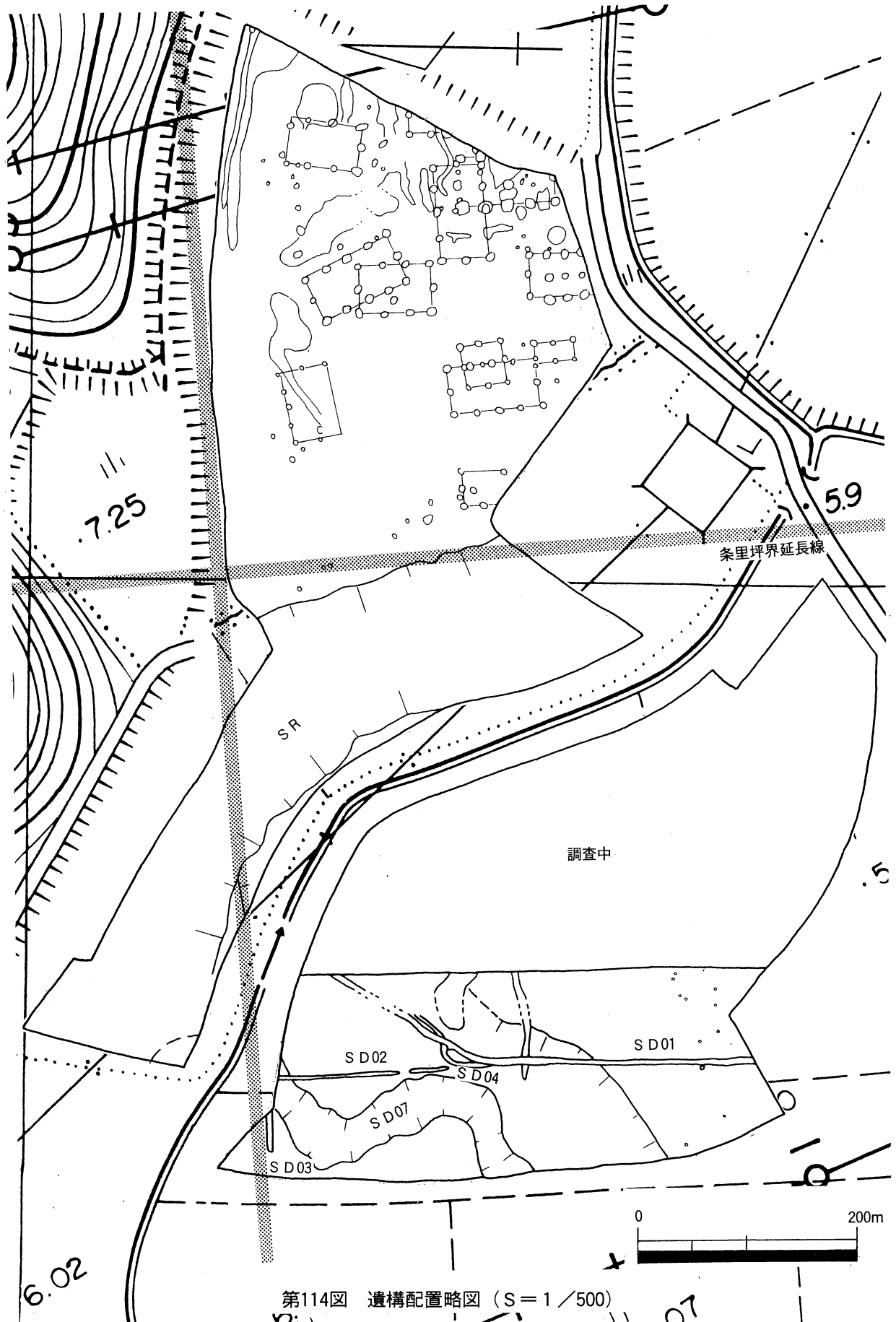


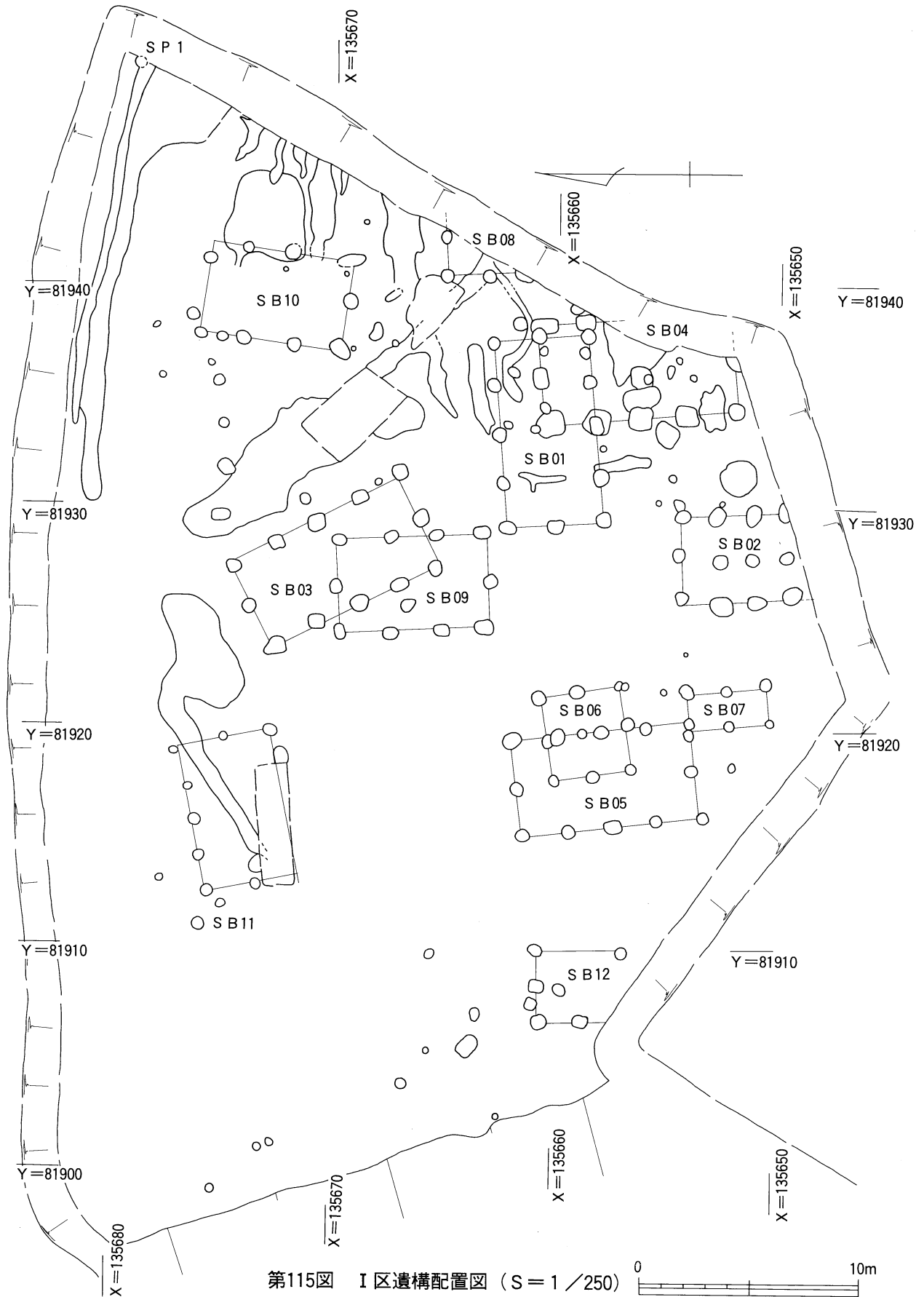
写真111 調査区遠景 (西から)

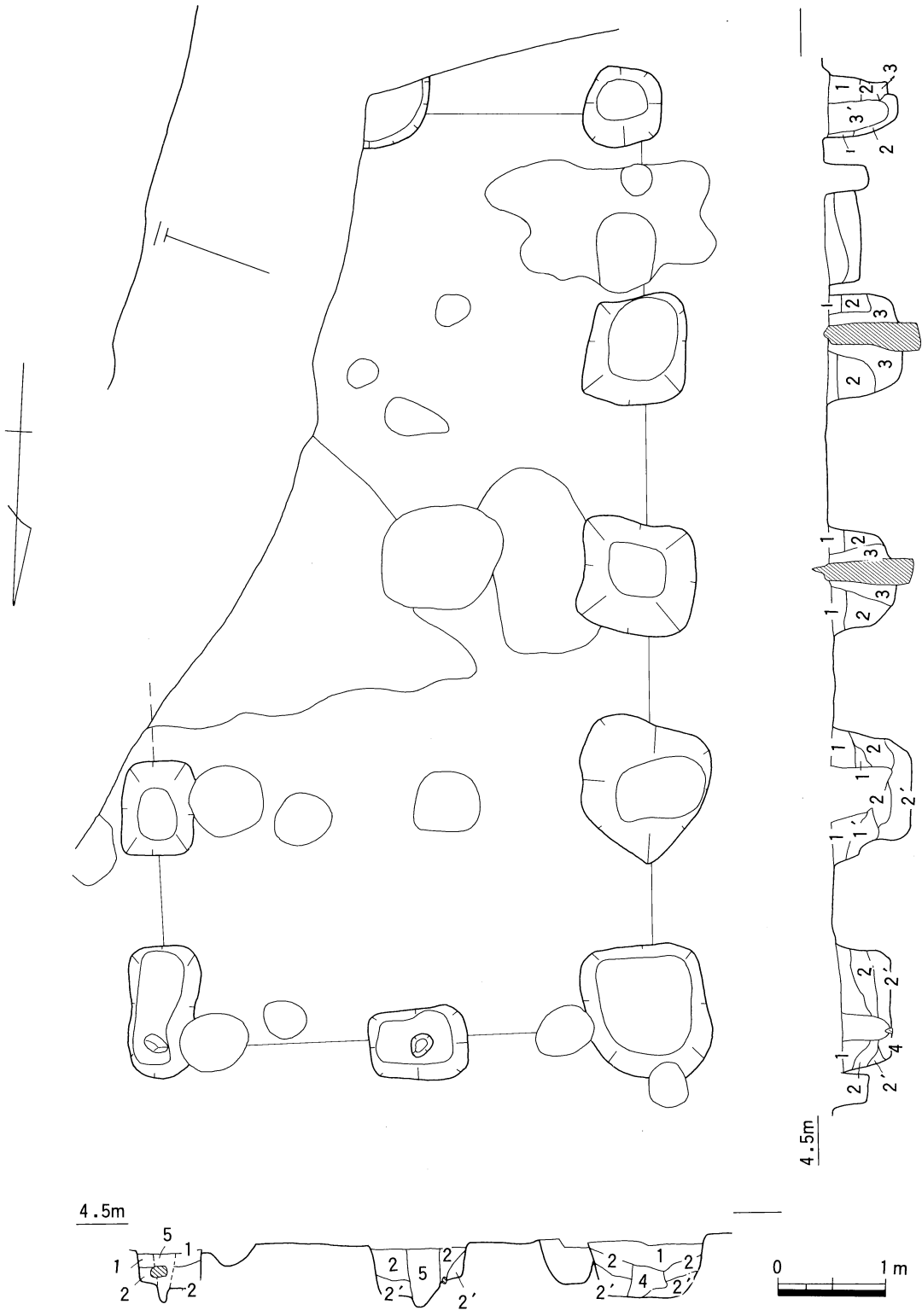


第113図 土層柱状図



第114図 遺構配置略図 (S=1/500)





- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 黄灰色小礫まじりシルト質土 | 3' 灰色小礫まじり粘質土 |
| 2 黄灰色シルト質土 | 4 黄灰色粘質土 |
| 2' 黄灰色粘質土 | 5 灰色シルト質土 |
| 3 灰色粘質土 (炭化物わずか含) | |

第116図 SB04平・断面図 (S=1/60)

迹田谷川下池遺跡

1. 立地と環境

迹田谷川下池遺跡は、大川郡引田町引田字迹田1086番地外に所在する。阿讃山脈に連なる鳴嶽から続く2つの丘陵に挟まれた谷筋の出口に立地し、標高約38~41mほどのなだらかな丘陵で、東側には川幅3mほどの足谷川が流れている。調査地中央部には南北にのびる浅い谷がある。

調査前には階段状の水田が作られていた。水田造成の際、遺構面が削平を受けている部分もあるが、包含層が厚いためもあり、近年の削平の影響は小さい。

引田町内の遺跡については、縄文時代のものとして天王谷で黒曜石製石鏃が、弥生時代のものとして昨年度調査した弥生時代中期の庵の谷遺跡では、堅穴住居遺構とともに多くの土器片、サヌカイト製石鏃・石錘・石槍、サヌカイトチップやたたき石などが出土している。その他、沖代蟹安で石臼、石斧片や土器片、迹田でサヌカイト製石鏃、塩屋で土器片が表面採集されている。古墳時代のものとしては、沖代水田遺跡で水田遺構と多くの須恵器が見つかり、沖代赤坂と沖代丸山で土器片が採集されている。

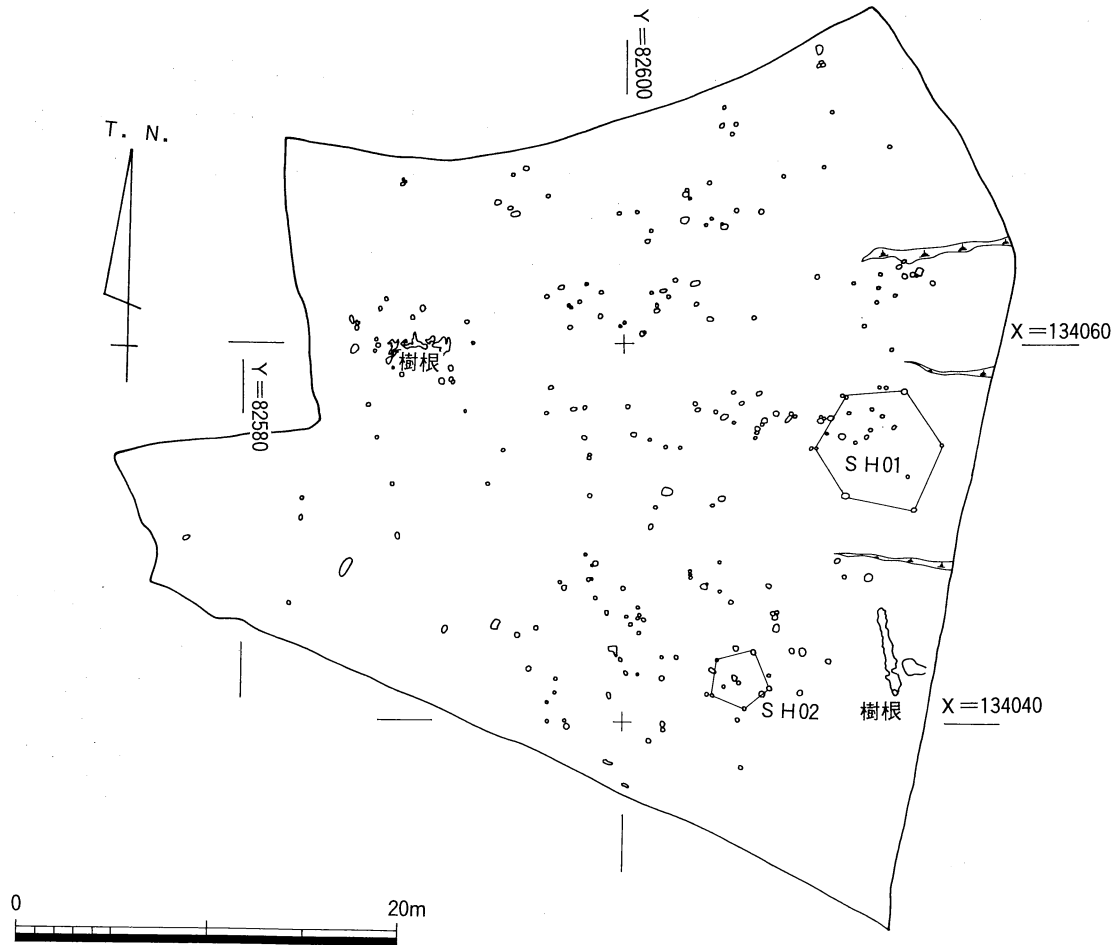


- A 迹田谷川下池遺跡
- B 迹田石垣遺跡
- C 鹿庭遺跡
- D 川北遺跡
- E 庵の谷遺跡
- F 天王谷遺跡
- G 川北1号墳
- H 引田城跡
- I 馬宿畑方遺跡
- J 沖代水田遺跡
- 1 天王谷
- 2 沖代蟹安
- 3 迹田
- 4 塩屋
- 5 沖代赤坂
- 6 沖代丸山
- 7 外源蔵
- 8 刈畑
- 9 内源蔵
- 10 川北
- 11 坂元大谷
- 12 川原谷
- 13 千葬古墳

第117図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (S = 1/50,000)

古墳は後期末の川北1号墳がある。これは横穴式石室をもつ小円墳であり、周辺地区には千葬古墳など数カ所の古墳があったとされるが、現存するのはこれだけである。古代のものとしては、外源蔵、刈畑、内源蔵で奈良時代の土器片、川北、坂本大谷で平安時代の土器片が採集されている。中世のものとしては、川原谷で備前焼の納骨壺、平成8年に調査された馬宿畑方遺跡で奈良～平安時代初期の製塩土器が出土している。近世のものとしては、戦国期から江戸時代初期まで用いられた引田城がある。

2. 調査の成果



第118図 遺構配置図 (S = 1 / 400)

検出された遺構には柱穴、土坑がある。柱穴は中央の浅い谷に比較的かたまって検出されている。これらの柱穴には円形に巡る2つの柱穴群がある。中央土坑や壁溝などが確認されてないので不確定だが立ち上がりの部分が削平された竪穴住居の可能性もある。調査時には平地住居の可能性も考えたが、検出された柱穴は多くが深さ15cm前後と浅く、包含層堆積以前に遺構面が削平されたと考えられるため住居であるとすれば竪穴住居であると考えている。S H01は柱穴を結ぶ円の直径が3m、S H02は直径が6.5mなのでS H01が径5m前後、S H02が径8.5m前後に復元できる。これらは調査区東側で検出されている。

出土遺物はきわめて少ないが、弥生土器片、サヌカイト製石鏃、剥片、チップが遺構から出土しており、出土遺物のない竪穴住居についても弥生時代に属すると考えられる。

鹿庭遺跡

1. 立地と環境

鹿庭遺跡は、大川郡引田町吉田字鹿庭6-1番地外に所在し、阿讃山脈に連なるピク山や大山の尾根に挟まれた谷筋を流れる馬宿川によって形成された扇状地の入口あたりに位置する。現在の地表の標高は約24mを測る。

引田町内では、昨年度まで本格的な発掘調査があまり行われておらず、川北1号墳（古墳後期末）や馬宿畑方遺跡（古代）の調査が行われているのみである。昨年度から四国横断自動車道建設（津田-引田間）に伴い、発掘調査が行われている周辺の遺跡としては、白鳥町の成重遺跡、池ノ奥遺跡、善門池西遺跡、引田町では庵の谷遺跡（弥生中期）、川北遺跡（古代、中世）、天王谷遺跡（中世）、辻田谷川下池遺跡（弥生）があり、また、辻田石垣遺跡と引き続き天王谷遺跡は来年度調査が行われる予定である。



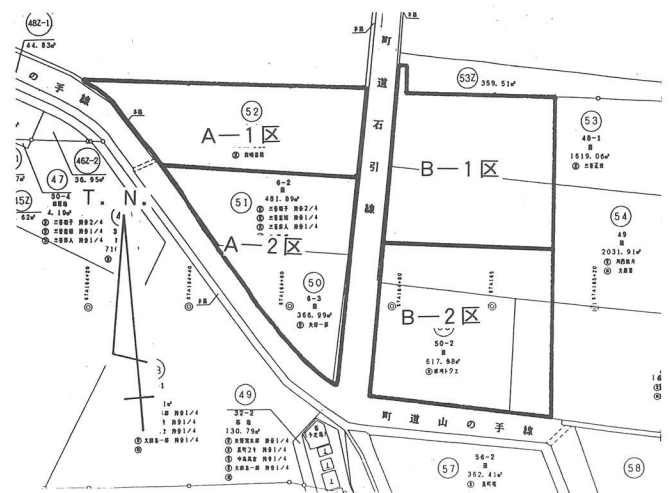
- | | |
|----------|------------|
| A 鹿庭遺跡 | F 辻田谷川下池遺跡 |
| B 天王谷遺跡 | G 庵の谷遺跡 |
| C 川北1号墳 | H 引田城跡 |
| D 川北遺跡 | I 沖代水田遺跡 |
| E 辻田石垣遺跡 | J 馬宿畑方遺跡 |

第119図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (S=1/50,000)

2. 調査の成果

鹿庭遺跡の発掘調査は本調査に先立ち平成9年5月と9月に予備調査を実施し、サヌカイト剥片と中世の遺物、遺構を確認した。この予備調査の結果を基に本調査対象面積3800㎡とした。調査区は調査対象地の中央の町道から西側をA区、東側をB区とした。調査対象地を地理的に見ると丘陵とその裾部の低地および馬宿川の扇状地からなる。調査区で言えば、A区西端部・南部とB区南部が丘陵、A区北部とB区北西部が低地部、B区北東部が扇状地である。しかし、丘陵部は圃場整備のため著しい削平を受けており、旧状を留めていない。

遺構面はA区北東部で2面、その他の部分で1面ある。A区北東部では上層の第1遺構面には中世の遺構が、下層の第2遺構面には弥生時代の遺構がある。その他の部分では遺構面は1面で、同一遺構面に弥生、中世の遺構が混ざって検出された。以下、時期ごとの調査概要を述べる。



第120図 調査区割図

弥生時代

B区SK02 調査区の北側で検出した土坑である。立地は扇状地へ向かって下る丘陵の先端部である。南側が壊されているが、平面形は楕円形である。現存長は南北90cm, 東西45cmを測る。埋土は4層に分けられるが、4層の最上面でサヌカイトの石核2点と剥片4点の計6点が重ねられた状態で出土している。他の遺物として石鏃2点、チップ9点がある。石鏃は2層と3層から、チップはどの層からも出土しており、平面的にも散らばって分布しているので、人為的にまとめて廃棄した状況は伺えない。この土坑の性格については石材の貯蔵、廃棄の2つの可能性があるが、詳細な検討は今後に委ねたい。また、付近でも2点の石核が遺構面上と扇状地上で出土している。土坑内及び付近で出土した石核はいずれもまだ剥片の採取が可能なものであった。時期決定できる遺物はないが、検出遺構面から弥生時代のものと考えられる。

1は石核である。不定形剥片を1枚剥離している。大きさは11.2cmであり、スクレイパーが製作できるサイズである。2、3は凹基式の石鏃である。2は先端部と脚部の片側を欠くが、細かい調整を両面に施す。3は抉り部に丁寧な調整を加えている。表面は白色に風化している。

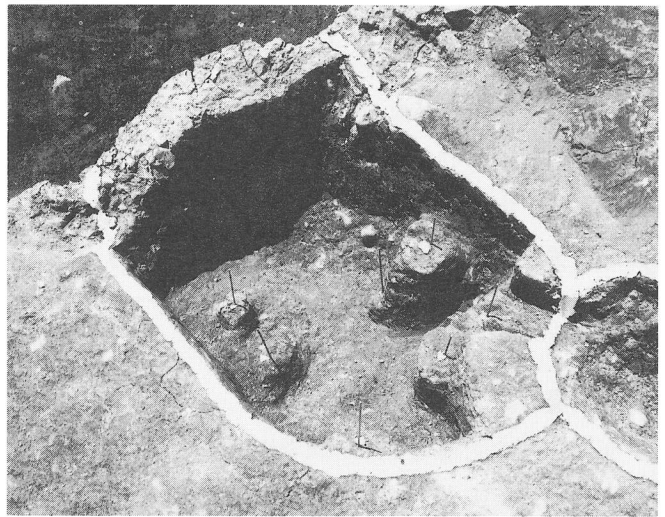
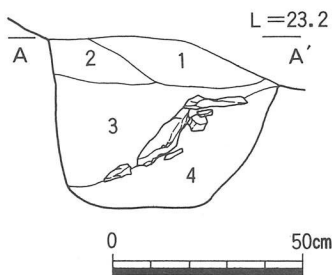
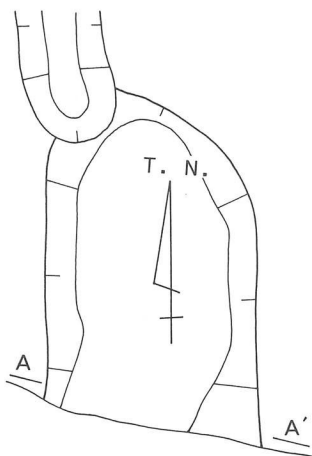
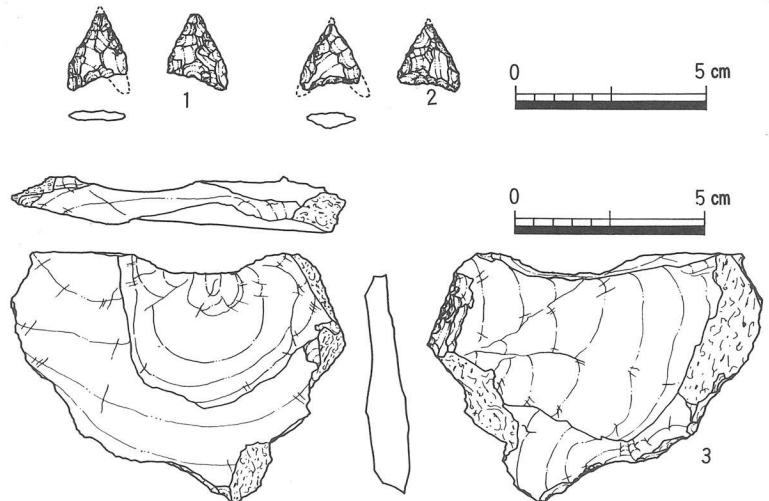


写真112 B区SK02遺物出土状況(東から)

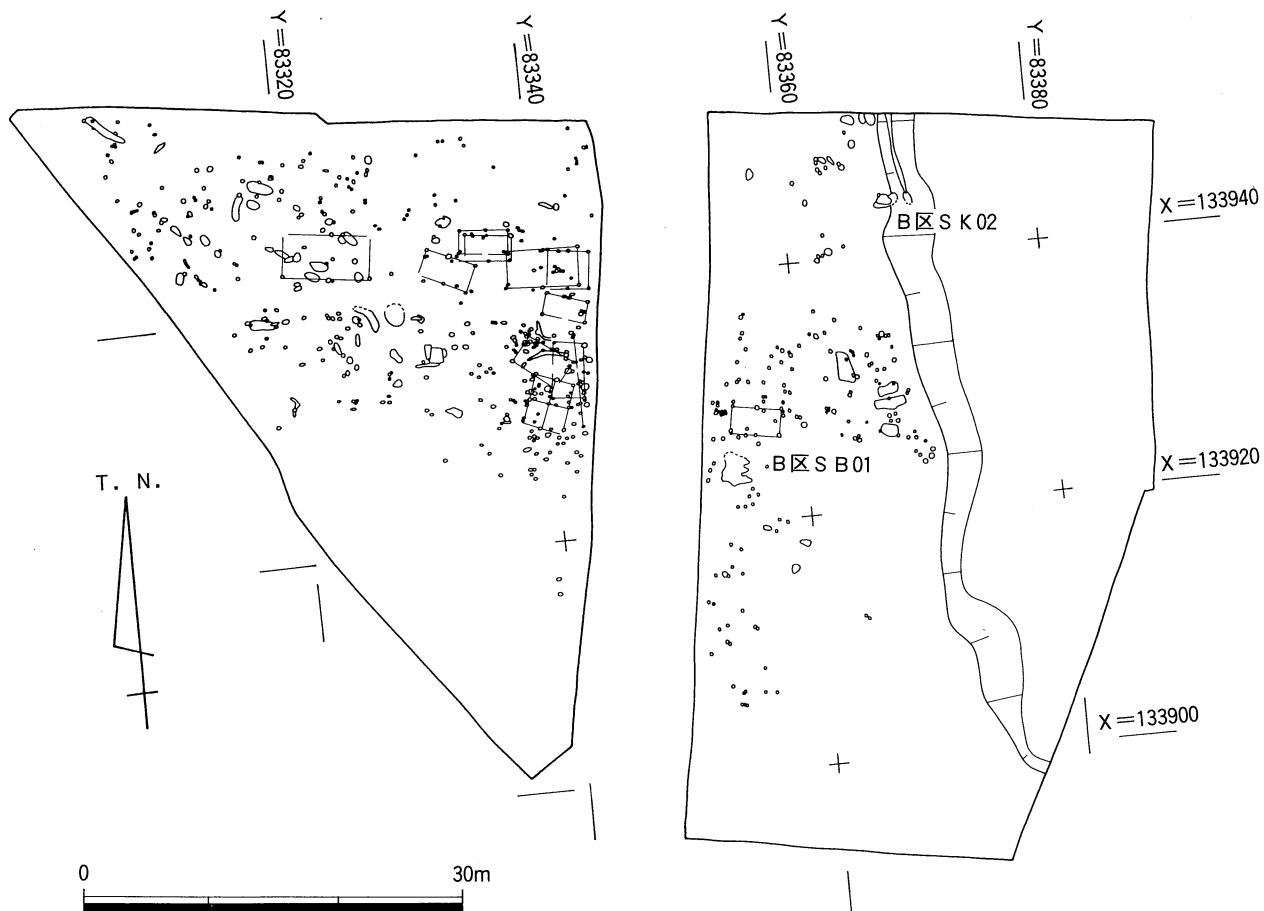


- 1. 浅黄色粘土 5Y7/4
- 2. 浅黄色粘土 5Y7/3
- 3. 灰色粘土 5Y5/1
- 4. 浅黄色粘土 5Y7/3

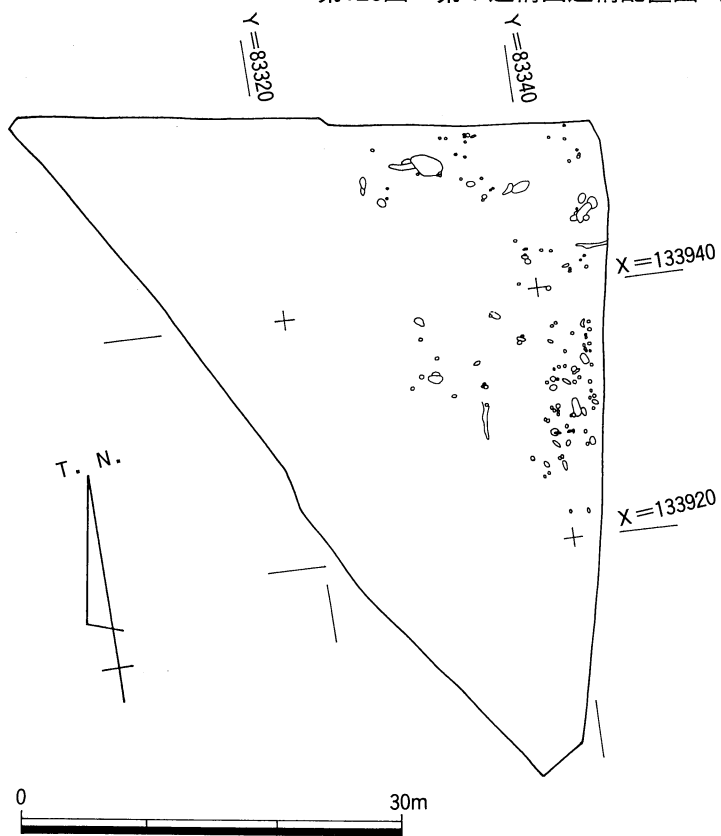


第121図 SK02
平・断面図(S=1/20)

第122図 SK02出土石器実測図



第123図 第1遺構面遺構配置図 (S = 1 / 600)



第124図 第2遺構面遺構配置図 (S = 1 / 600)

中世

B区SB01 調査区西端で検出した掘立柱建物である。桁行1間(約2.4m)、梁行2間(4.1m)を測る。主軸方位はN-81°-Wである。また、北東隅の柱穴を欠く。柱穴は径20cm前後の円形で断面形はU字形を呈する。埋土はにぶい黄褐色粘土である。A区の第1遺構面で検出されたSB01に近接する掘立柱建物群には主軸方位がほぼ一致するものがあり、建物や柱穴の規模も類似する。これらは遺物から13世紀に比定できる。よって、SB01も出土遺物は皆無であるが、A区の掘立柱建物群と同じく13世紀の遺構と考えられる。

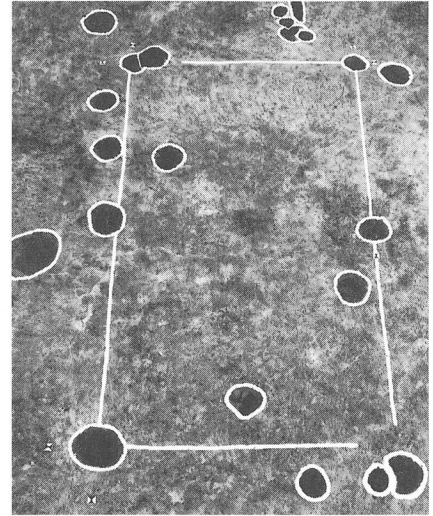


写真113 B区SB01全景(西から)

3. まとめ

鹿庭遺跡ではA区の北東部で遺構面を2面検出している。第1面は中世、第2面は弥生時代の遺構面である。それ以外のA区、B区では1面の遺構面で弥生、中世の遺構が混在して検出された。以下時期ごとに説明する。

弥生時代

弥生時代の遺構としてはサヌカイト集積土坑などがある。サヌカイト集積土坑の性格については貯蔵用か、廃棄の結果かについて今後検討しなければならないが、いずれにせよ遺跡内での石器製作に伴うものである。石器製作による遺物として他に、A区では流れ込みによるものではあるが、第1遺構面包含層より、サヌカイト製石鏃、石鏃未製品、剥片、チップが出土している。石鏃未製品は先端部のみ作られたものからほぼ完成したものまで加工度から数工程に分けられる。また、チップは数10点が1カ所に重なり合って出土した所もあり、石器製作後にまとめて廃棄したような状態を呈していた。これらのチップについてはほとんど二次的な移動はないと考えられる。

このように石器製作の痕跡は多く看取されたが、伴う集落は検出されなかった。よって、もちろん調査区外に集落が営まれていた可能性はあるが、この時期には鹿庭遺跡の周囲は狩猟の場であったと考えられる。これに関して遺跡内から出土した石器31点中21点までが石鏃とその未製品であることも示唆的である。このことから集落外での石器製作を検討する上で、有効な資料となりうると考える。

中世

13世紀の掘立柱建物を11棟検出している。これらは丘陵の急傾斜が途切れた低地部でも西側に集中している。これは東側にある馬宿川のためであろう。馬宿川はかつて暴れ川であり、その流域は江戸時代以降に本格的な開発が始まったといわれている。西側への建物の集中は馬宿川を避けた結果と考えられる。建物の規模は多くが1間×2間で小規模なものである。主軸方向や柱穴間の距離を検討すると4グループに分けられるが、1グループは2,3棟から構成される。建物群を取り囲むような区画溝などは検出されなかった。各グループの形成要因が時期差にあるとすれば、1時期に2,3棟からなる小規模な屋敷地が山裾に貼り付くようにして営まれていた集落景観を復元できる。建物以外の遺構として、A区西側で墓の可能性をもつ土坑を3基検出している。これらは規模が2m×1m程であり、類似した主軸方向をもつ。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しこくおうだんじどうしゃどうけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	シリーズ名		シリーズ番号					
巻次								
編著者名	大山眞充・藤好史郎・中西昇・植松邦浩・島田英夫・西岡達哉・樋本清輝・濱松春水・片桐孝浩・喜岡永光・森格也・木下晴一・池田道雄・山元素子・森下英治・宮崎哲治・多田慎・佐々木正之・溝渕大輔・松岡宏一・豊島修・野崎隆亨・住野正和・信里芳紀・松本和彦・小野秀幸・長井博志							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団四国支社・建設省四国地方建設局・香川県土木部							
発行年月日	1999年3月31日							
頁数	総頁数	目次等	本文	総表	挿図枚数	写真枚数		
	145	9	136	2	124	113		
ふりがな	ふりがな	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町	遺跡	北緯	東経			
かがわぐんじょうり 香川郡条里 C地	香川県高松市 勅使町	37201		34° 18' 17"	134° 01' 03"	1998.4.1~ 1998.5.31 1999.2.1~ 1999.3.31	770㎡	
しょうぼこいせき 正箱遺跡	香川県高松市 檀紙町	37201		34° 17' 40"	133° 59' 50"	1999.1.1~ 1999.2.28	800㎡	
なかもりいせき 中森遺跡	香川県高松市 檀紙町	37201		34° 18' 10"	134° 00' 20"	1998.6.1~ 1998.8.31	3,015㎡	
はやしほうじろいせき 林・坊城遺跡	香川県高松市 林町	37201		34° 18' 10"	134° 04' 40"	1998.9.1~ 1998.12.31	2,000㎡	
ひがしやまき 東山崎・ 水田遺跡	香川県高松市 東山崎町	37201		34° 17' 52"	134° 06' 30"	1998.7.1~ 1998.9.30	1,978㎡	
まへだひがし 前田東・ 中村遺跡	香川県高松市 前田東町	37201		34° 17' 40"	134° 07' 12"	1998.4.1~ 1999.3.31	7,206㎡	
つばい井遺跡	香川県大川郡 大内町中山	37303		34° 15' 03"	134° 17' 40"	1998.9.1~ 1999.3.31	6,566㎡	
こんびらやまいせき 金毘羅山遺跡	香川県大川郡 大内町水主下 屋敷	37303		34° 14' 02"	134° 19' 26"	1998.5.7~ 1998.8.31	3,600㎡	
とうやまのみせき 塔の山南遺跡	香川県大川郡 大内町川東杖 の端	37303		34° 14' 00"	134° 19' 38"	1999.1.1~ 1999.3.26	1,300㎡	
わらまいせき 原間遺跡	香川県大川郡 大内町川東原 間	37303		34° 13' 39"	134° 20' 09"	1998.4.1~ 1999.3.31	24,243㎡	
といばなちく区 樋端地区	香川県大川郡 白鳥町西藤井	37302		34° 13' 47"	134° 20' 25"	1998.12.1~ 1999.3.31	3,590㎡	
なりしげいせき 成重遺跡	香川県大川郡 白鳥町白鳥成 重	37302		34° 13' 39"	134° 20' 50"	1998.4.1~ 1999.3.31	6,543㎡	
ぜんもんいけにし 善門池西遺跡	香川県大川郡 白鳥町白鳥谷	37302		34° 13' 38"	134° 21' 09"	1998.12.1~ 1999.3.31	2,500㎡	
いけおくいせき 池の奥遺跡	香川県大川郡 白鳥町白鳥谷	37302		34° 13' 37"	134° 21' 30"	1998.6.1~ 1999.3.26	8,700㎡	
かわきたいせき 川北遺跡	香川県大川郡 引田町小海	37301		34° 13' 11"	134° 23' 22"	1998.8.1~ 1999.3.31	6,038㎡	
たにがわ 田谷川 遺跡	香川県大川郡 引田町田谷	37301		34° 12' 19"	134° 23' 46"	1998.12.1~ 1999.1.29	1,450㎡	
か 鹿庭遺跡	香川県大川郡 引田町吉田	37301		34° 12' 15"	134° 24' 17"	1998.4.6~ 1998.8.31	3,800㎡	

所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
香川郡条里C地 区	平安時代	溝	黒色土器	
正箱遺跡	旧石器時代～縄文時代		旧石器・縄文土器	
	弥生時代	土坑	弥生土器・石器	
	奈良時代	掘立柱建物・溝	須恵器・土師器	
中森遺跡	旧石器時代	石器ブロック	旧石器	旧石器接合資料
	室町時代	掘立柱建物・溝	土師器・陶器・鋳型・溶解炉片	
林・坊城遺跡	縄文時代	溝・柱穴列	縄文土器・石器	
	弥生時代	竪穴住居・円形周溝墓	弥生土器・石器	
東山崎・水田遺跡	室町時代	溝・柱穴	土師器・備前焼	
	江戸時代	溝・柱穴	青磁	
前田東・中村遺跡	縄文時代～弥生時代	自然河川・溝・土坑	縄文土器・弥生土器・石器	
	奈良時代～平安時代	掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柱穴	須恵器・土師器・瓦・緑釉陶器・黒色土器	
	鎌倉時代	掘立柱建物・溝・土坑・井戸・柱穴	須恵器・土師器・青磁	
坪井遺跡	奈良時代	掘立柱建物・溝・土坑・自然河川	須恵器・土師器・黒色土器	刻印付き須恵器
	平安時代	井戸	須恵器・土師器	
	鎌倉時代	溝	土師器	
	近世	井戸・池	陶磁器	
金毘羅山遺跡	縄文時代晩期～弥生時代	竪穴住居・土器棺墓・溝・土坑・柱穴・自然河川	縄文土器・弥生土器・石器・玦状耳飾	
	古墳時代～飛鳥時代	竪穴住居・土坑・柱穴・自然河川	須恵器・土師器	
	鎌倉時代	掘立柱建物・土坑・柱穴	須恵器・土師器・瓦器・青磁・鉄滓	
	江戸時代	砂糖竈・井戸・土坑	陶磁器・焙烙	
塔の山南遺跡	弥生時代後期	石蓋土壙墓・箱式石棺墓・土壙墓・土坑		
原間遺跡	弥生時代後期	竪穴住居・土器棺墓	弥生土器・石斧	
	古墳時代 中期末～後期	古墳・濠	須恵器・土師器	
	近世	掘立柱建物・砂糖竈	陶器・磁器(染付・瀬戸)	
樋端地区	弥生時代後期	土器棺墓・石棺墓	弥生土器	
	古墳時代後期	古墳	須恵器・土師器・耳環・人骨・鉄製品(鉄鏃)	
成重遺跡	弥生時代中期	竪穴住居・方形周溝墓・集石(墓)	弥生土器・石器・磨製石器・勾玉	
	弥生時代後期	竪穴住居・方形周溝墓・土壙墓	弥生土器・石器・鉄器	
	古墳時代	竪穴住居・土壙墓・土坑	土師器・鉄器	
	平安時代～室町時代	掘立柱建物・土壙墓・地鎮遺構	土師器・陶磁器・銅銭	
善門池西遺跡	弥生時代後期～中期	竪穴住居・柱穴	弥生土器・石鏃・サヌカイト製石鏃	
	古墳時代後期	竪穴住居	須恵器・土師器	
	鎌倉時代～江戸時代	溝状遺構	須恵器・土師器・備前焼壺・銅銭	
池の奥遺跡	弥生時代中期	竪穴住居・土坑・柱穴・自然河川	弥生土器・土製紡錘車・石器・磨製石剣	
川北遺跡	弥生時代～室町時代	掘立柱建物・溝・柱穴・自然河川	須恵器・土師器	
込田谷川下池遺跡	弥生時代	竪穴住居・柱穴	弥生土器・石鏃	
鹿庭遺跡	弥生時代	サヌカイト集積土坑・溝・柱穴	弥生土器・石器	
	鎌倉時代	掘立柱建物・土坑	須恵器・土師器・鉄器	

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度
平成11年3月31日

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団四国支社
建設省四国地方建設局
香川県土木部

印刷 成光社